
終焉の翼

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終焉の翼

【Nコード】

N4782D

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

西方で大きな戦争が起こっている。小さな漁村であるオミオスではそんな遠くの大陸の話よりも村の周囲に出没する魔物たちの存在の方が重大で脅威だった。「よそ者の子」と罵られながらもユーリは自警団員として村を守っていた。ただ、唯一の肉親シーニスを守るために。やがてそんな村に一人の男が流れ着く。それが、後に竜王リヒトによって隠蔽される冷たく悲しい物語の始まりだった。

序章

序章

「スウ！」

次々と湧いて出る魔物を切り捨てて、彼は叫んだ。

西方大陸、エテルナード領地レキイ。

後にその地名をとり「レキイ大戦」と名付けられる戦線の中、彼は一人の男を捜していた。

淡い水色の髪を血に濡らした背の低い男。一見して少年に見えるほど小柄な彼の手には身の丈ほどの大剣が握られている。それを片手で振り回し、彼は戦場を駆ける。

童顔であるが、彼の面差しには少年という印象は少ない。

その金の瞳の奥にある強い意志が少年の気配を消しているのだろう。実際、彼は人であれば既に少年と呼べる年齢ではなかった。それどころか人であれば既にこの世にない歳に達している。

しかし彼の身体はまだ若々しく、力もまたその外見に相応しいものを備えていた。

否、それ以上と言うべきか。

「リヒト！」

魔物を切り捨てると自分と呼ぶ声が聞こえた。赤銅の髪を高い位置で括った女が駆けてくる。

捜している人間ではない。

だが、敵ではない。

「ティアー！」

彼もまた彼女の名を呼ぶ。

戦場を駆けてきたため同じく血にまみれた女は瞳までも赤い。彼

女のそれは返り血を浴びたためではなく、本来の色だった。

人であれば二十代後半、女として色を増し始めた背の高い女。彼女もまた見かけ通りの年齢ではなかった。

今、レキイにいる半数以上は人ではない。

この戦はそう言う戦いだった。

彼女はリヒトの側に駆け寄るが早いか叫ぶように問う。

それは彼の質問と同じ内容だった。

「奴はどこだ！」

「彼は一緒じゃないの？」

彼女は顔をしかめる。

「では、もう城内か」

彼は頷いた。

「そのようだね。……僕らも急がないと、取り返しのつかないことになるかもしれない」

女は怪訝そうに眉をひそめた。

「お前は、私と違って奴を信頼しているように見えたが」

「信頼しているよ。けど、彼は彼女の」

言い差して彼は振り向きざまに剣を振るった。

鈍い音がして魔物が倒れる。

同時に彼女の方でも何か重いものが地面に落ちる音がした。彼女の手には漆黒に塗られた細い剣が握られている。

「情に流されれば、か。私は奴に力を貸しているくそったれの方が信用ならんと思っているが」

「冥王が？ どうして？」

ティアーは少し険しい顔つきで笑う。

自嘲しているような表情だった。

「地上がこんな事になり、争いを嫌う精霊王すらも戦場に立っている。なのに、あの野郎だけは姿を見せない。信頼出来る方がおかしいだろう」

「確かに。元々冥王は明確な形を持たないけれど、作ろうとして出

来ない訳ではないからね。けれど冥府を不在にする訳にはいかないよ？ あそこは、死者を管理する場所だからね」

「だから余計に、だ。死を管理するものが、あんな力を誰かに貸し与えるとは。奴らは野郎に利用されているだけののように思えてならない」

くすり、とりヒトは笑う。

むっとした表情で彼女は睨んだ。

「言いたいことがあるのならはっきりと言え」

「なんだかんだ言いながらヴェイのこと信頼しているんだなって」
彼女は舌打ちをして踵を返す。

「ちっ、勝手に言ってる」

リヒトはにこりと笑った。

「言えって言ったのはそっちだよ、魔王様」

「そんなことはどうでもいい」

言い方はきついが、彼女が赤面しているのが分かる。

元々リヒトとティアーは対立する立場にあった。

特に彼女は人間界と呼ばれるこちら側と関わるような人物ではなく、本来ならば敵として戦場に立っていてもおかしくない間柄なのだ。それが一時的にとは言え仲間になり、共に戦っている。

この魔王の見せる表情をリヒトは見続けた。

ぞんざいで酷い物言いをするが、想像していたよりも話の分かる女だった。そもそも彼女に出会うまで彼は当代の魔王が女性であることを知らなかった。この何代目かの女魔王は情に脆い。言い方は酷くぶっきらぼうであるが少なくとも歴代魔王たちのように「同じ魔族だけ栄えればいい」なんていう考え方を持っているようではなかった。

他の竜族の反対を押し切ってまで参戦した一番の収穫はそれだった。

彼女相手になら調停を結ぶ気にもなれる。

「時間がない。空間を開く」

彼女は剣を振るって地面に突き立てる。剣の刺さった場所を中心に青白い光が魔法陣の形に走った。

「こんなところで？」

「無茶は承知だ。だが、取り返しのつかない事態になるよりマシだろう。お前、私がヴェイの存在を捕らえるまで場にあの低級魔族たちを近づかせるな」

ふう、とりヒトは溜息をついた。

「はいはい。……簡単に言うけど結構重労働なんだよね」

弱いとはいえ倒しても倒してもキリ無く出てくる魔物を退治するのは骨が折れる。弱いだけに余計に気力と体力が奪われる。

人間の何倍もの体力を持っている彼だったがさすがに気が萎えてきた。

漏れた彼の文句に彼女は目を光らせる。

「若造が、何を言っている」

「一応僕だって竜王なんだからさ、成人しているんだって。それを若造って呼ぶ？」

「無駄口を叩くな」

「横柄だね」

口を曲げながらも彼は魔物達と戦う。

彼女が低級と呼んだ魔族達は、彼女が統べる魔界に住む動物だ。

本来これほどまでに凶暴ではない。開いた空間から無理矢理人間界に連れてこられたため、狂気にあてられているのだ。魔界に戻すこともできない。

だから殺してしまうのが彼らにとって最善なのだ。

魔王はそう言い切り捨てる。

責めて楽に行けるようにと自ら引導を渡す。

それを知っているからこそリヒトは同情したりしない。そんな軽い気持ちならば彼女に失礼だろう。

だから不平不満を漏らしながらも安心して動けるように助ける。それが戦場で生まれた信頼関係だった。

早く終わらせられたらと強く願う。

魔王に同族をこれ以上無駄に狩らせたくはなかった。

彼女は表立って表現しないし、近くで見なければ分からないだろうが心を痛めている。だから人の起こした戦いの尻ぬぐいをしているのだ。

この事態を解決するには開いた穴を閉じるより他ない。これは人為的なもの、すなわち術者自身が閉じるか、死ぬかしなければ終わらないのだ。

そして、今彼女はその元凶の元へと飛ぼうとしている。
空間を歪め、最も正確な位置へと。

「捕らえた！」

彼女が叫ぶ。

魔物を切り捨てて彼は彼女に向かって走り出した。

光の魔法陣が強い光を放つ。

リヒトが滑り込むように光の中に飛び込んだ。

そして、光が二人を包み込んだ。

一話 海岸に流れ着いた男

剣を握ると妙な高揚感に襲われる。

正直、その感覚が好きなのか嫌いなのか分からない。

襲いかかってくる獣たちを切り捨てると吹き出した血しぶきが顔にかかる。生ぬるく鉄を含んだような嫌な匂い。

それなのに、彼はその匂いで興奮するのだ。

そして、次第に考えるのが嫌になる。見えてくる急所を狙い、狂った獣や魔物達を殲滅することだけを考える。力はそれほど必要ない。

人は淡々と剣を振るう彼の姿を見て畏怖の念を抱く。

どうしてそんなに強いのか問われても答えようがない。まるで、自分の手が剣になってしまったかのような感覚。だから手を伸ばすように、指を曲げるように、何の苦も感じず剣を振るう事が出来る。そんな感覚の話をしてもし誰一人理解する者は現れない。

おそらく、自分は化け物なのだろうと思う。

襲いかかる魔物の攻撃を交わしながら彼は魔物に剣を突き立てた。父親も化け物だった。

そう呼ばれてもおかしくないくらい強かった。幼い頃は父親の強さに憧れたけれど今は少し怖かった。

いつか自分も父親のようになってしまおうのではないかと考えると恐ろしかった。

遠くで、何人もの仲間達が同様に武器をもって戦っている。援護する弓矢が彼らの頭上を飛び交っていた。

北方大陸リグにある小国ラグネ。その端にあるオミオスという小さな村の自警団に彼は所属している。

このところ魔物の出現が多い。

守護の紋章術がない街の外に出ると魔物の数は急激に増えるのは事実だが、最近のそれは酷いものだった。今月だけで二十人ほどの

村人が魔物に襲われている。死者すら出してしまった。

西の大陸で起こった戦いを終わらせるためにこの辺りの地域を治めていた竜王が不在になった。そのため魔物や獣が凶暴化して襲ってくるのだ。実際のところ、竜王がまだ大陸にいる間ですら凶暴化は起こっていた。

世界に何か異変が起こっているのだろう、と人は噂をする。

「ユーリ」

呼ばれて彼ははっとした。

魔物や獣たちはもう動かなくなっている。

戦闘は既に終わっていた。

「帰ろうぜ、後は後方支援の連中がかたづけしておくてさ」

「あ……ああ」

頷いて見上げた先にある親友の顔を見てユーリは顔をしかめた。

「ジェルド、お前またサボっていただろう」

「何のことだ？」

ジェルドは飄々と笑う。

彼の衣服は血に汚れるどころか、乱れてすらいない。戦いに参加していなかった証拠だ。

仮にも彼も自警団の一員で村長の甥。戦闘が始まれば真っ先に動かなければならない立場にある。それなのに彼は戦闘に参加していないことが多い。

この非常識な男が、ユーリよりも七つも年上の二十三だと言うことがどうしても納得いかなかった。

「何の事だ、じゃないよ」

弓を持った男が腕組みをして口論に参戦する。

ジェルドと同じ顔をしていたが、彼の意見はユーリとおなじだった。

「言っておくけれど上から見えたからね。後片付けジェルドも参加するんだよ」

「ラルド」

「ああ、ユーリ、お疲れ様。早く水浴びしたいでしょう？ シーニ
スも心配しているだろうから早く帰って良いからね」

「俺とユーリと随分対応が違うじゃねえか」

「生憎僕はサボっている人間にかける慈悲なんか持ち合わせていないんだ」

ラルドは口元だけを微笑ませる。

二人は双子という訳ではない。同じ年に生まれた従兄弟で顔だけはそっくりだが、性格も得意とする武器も違う。冷静で大人しい性格のラルドは弓矢を使い、面倒くさがりで傍若無人なジェルドは剣を使う。

ラルドは村長の息子でその統率力の高さを買われ自警団の青年部を取りまとめている。同じ顔でもこうも違うのかと村のみんなは笑う。だが、ユーリに言わせれば二人は根本的なところでよく似ているのだ。ラルドのジェルドにだけ見せる不遜な態度とか、ジェルドの危険に関する冷静な判断とか間近にいる人でなければ気付かないだろう。

本当に双子ではないかと思うほど似ている。

「ラルドさん！」

ばたばたと音をさせて走ってきたのは自警団員のネビスだった。

ジェルド曰く、押せば転がっていきそうな少年。ユーリと同一年だ。

「よー、ふとっちょ、どうしたんだ？ 赤い顔がますます赤いぞ」

「役立たずのバカルドには用はねーよ。……それより、ラルドさん、大変なんですよ、海に色んなもんが流れ付いちゃって」

「ああ、西の大陸の戦争のものだね。何か危険なものでも？」

通常なら西の大陸から流れ着くものなんてない。

だが、戦争で海の力が大量に消費された為に潮の流れが変わっている。それに加え戦争では魔法のかかった武具が使われる。浜には戦争で使われたらしいものが数多く流れ着いていた。先だっても強い呪いのかかった剣が流れ着きラグネの刑吏に引き取ってもらったばかりだ。

「それが、そのう」

ネビスは口ごもる。

「どうした？ 舌でも喉に詰まらせたか？」

「どうしてお前はいつも一言余計なんだ。一体何が流れ着いたんだ？」

「人間」

「死体か、流れ着くのは初めてだね。浜の方は女の人ばかりだからさぞかし驚いただろう。すぐにでも男手を……」

「違うんです！ 死んでないんです」

一瞬、理解が出来ずに瞬いた。

西の大陸から流れてきたとは考えにくい。いくら魔法で強化したとしても、西の大陸からの距離を命あるまま辿り着ける訳がない。船や何かが沈没して別の場所から流れ着いたか、あるいは旅をしていて海岸で行き倒れたか。

始めに声を出したのはジェルドだった。

「今は誰が？」

「シーニスが家に連れ帰った。だから、ユーリも戻った方が良くないかって」

後の方はもごもごしながらうつむく。

ユーリは笑う。

「それでわざわざ？」

「違うよ、ラルドさんに報告しなきゃいけなかったから、ついでだよ」

「それはありがとう」

ユーリは礼を言って剣に付いた血を払った。

ネビスはびくつとする。

怖いのだ。魔物も、魔物の血も、それを平気で退治する化け物のように強いユーリのこと。ネビスだけではない。村のほとんどの人間がユーリに一拍置く。本当に包みなく言い合えるのはジェルド、ラルドくらいのものである。

ユーリは「よそ者の子」だから。

「俺も行くか？」

「だーめ、ジェルドはこっちの仕事がのこっているだろう？ ユーリ、シーニスによろしくね」

「ああ」

「ちよつと待て、仕事するから挨拶くらいさせろ！」

首根っこを捕まれて連行されかけていたジェルドは慌ててふりほどいてユーリの元に戻ってくる。

ジェルドは皮肉っぽい笑みを浮かべた。

「大変だろうが頑張れよ」

ジェルドは拳を突き出す。

「ああ」

ユーリは頷いて彼の拳に自分の拳を軽くあてた。

シーニスは六歳年の離れた姉で今年二十二になる。

母はこの村の出身者でユーリを生んで間もなく亡くなった。よそ者と言われながらもこの村を守り続けた父親は八年前に魔物と戦って死んだ。だから彼女はユーリにとって唯一残された肉親であり誰よりも大切な人だった。

だから幸せになつて欲しいと願う。

だけど、どうして。

彼女はいつも厄介ごとを引き受けてしまうのだろう。

今は大分「よそ者の子」に慣れたオミオスの人達。ユーリはあまり知らないが昔はもっと酷かったのだと聞いた。シーニスも村の子供にいじめられたり、大人達には無視されたり。父親が望まれもせず違う場所から移り住んだだけというのに不当な扱いを受けた。

父親がやって来た功績や、今、シーニスが面倒ごとを嫌な顔もせ

ずに引き受けているというところを見ればこんなにも肩身の狭い思いをしなくたっていいはずだ。

今回のことだって、流れ着いた得体の知れない人間をいのように押しつけられたのだろう。

ユーリが怒ればきつと彼女は笑ってこういう。

困っている人がいれば助けるのが当然。

村の人間に助けられたことなんてないのに、人の良い姉は笑いながら嫌なことでも引き受ける。

「姉さん、ただいま」

声をかけて部屋に入ると、シーニスは唇に指を押し当てて静かにするように求めた。

「ネビスから聞いたでしょう？」

「ああ、その人が？」

「そうよ。先刻までうなされていたけど、今ようやく落ち着いたところよ、起こさないであげてね」

ユーリは驚いて目を見開いた。

狭い部屋の奥に作られた簡易的な寝台に寝かされていたのは男だった。

細身であるが、長身であることが予想出来る。年は二十代後半くらいだろう。整った顔立ちで、目はきつく閉じられている。流れ着いたということからももう少しやつれたような人を想像していたが、そんなことを微塵も感じさせない健康的な外見をしている。

身体の方は毛布がかかっているために分らないが、顔には目立った外傷はない。行き倒れたにしても、流れ付いたにしても綺麗すぎた。

だが、ユーリが驚いたのはそれではなかった。

いやそれにも驚いたがそれ以上に惹きつけられる者があったのだ。髪の色だ。

輝く銀色の髪をしていた。

それは光の加減でいくらでも色を変える美しい髪。純白の絹のよ

うでもあれば、使い込まれた銀製品のような深い色合いも示す。薪を燃した後に残る灰のようでもあり、美しく見せるために幾重にも釉薬を塗られた陶磁器のようでもある。

不思議な色だった。

全身が粟立った。

一口に銀色と言ってしまうのがもったいない位の優美な色。

（王だ）

本能的にユーリは思う。

この人は、きつとどこかの高貴な場所の生まれなのだろう。そうでなければ神か精霊の類。本来ならばこんな辺境の村では見ることも叶わないほどの尊い人。

西の大陸から流れてきたのだろうか。

彼ならば不可能ではない。

そんな気がした。

「ユーリ？」

不審そうにシーニスが呼びかける。

「？」

ユーリは振り向いた。

「どうして泣いているの？」

「え？」

頬に触れる。

指先に冷たいものが当たる。

……涙だった。

どうして涙が出ているのだろうか。

自分でも訳が分からない。

ただ胸の奥が激情に触れたように熱かった。

それが、後に竜王リヒトによって隠蔽される物語の始まりだった。

二話 紋章師

「ユーリ」

自警団の見回り仕事を終え、いつものように遠回りをして家に帰ろうとしている時だった。ラルドに呼び止められユーリは足を止めた。

村の広場を抜けていけば家に着くのは早い。だが側には市場がある。血だらけの格好を街の人に見られるのが嫌でいつも遠回りをして帰るのだ。亡くなった父親もいつもそうしていた。自分はこの道の反対側から来て父を出迎えた。

父の名はソード。どこかの古い言葉で「剣」という意味。その名が示すように父は強かった。

ユーリが戦いの時に覚えるあの感覚を父もまた味わっていたのだろうか。

自分の存在すら否定しかねない感覚。恐ろしくて止めてしまいたいのに、戦わずにはいられない身体感覚。父はあの感覚を知っているのだろうか。

「ユーリ、あの人の様子はどう？」

「大分動けそうな程に回復している。体調が整ったら出て行くように言ったから安心しろ……って村長に伝えてくれ」

ラルドは苦笑った。

「お見通しだね」

「長老はともかく、村長はよそ者嫌いだからな。ヴェイが目覚める前に、一度見に來ただけで後は來ないだろう？　そう言う事だよ」
流れ着いた男は数日経って目を覚ました。

初めは状況を把握しきれないといった様子だったが、やがて落ち着くと静かに礼を述べた。言葉はぞんざいで高圧的だったが、声音は穏やかな人だった。

彼はヴェイと名乗り、ユーリが名を告げると何故だか酷く驚いた

様子を見せた。理由を尋ねると彼は「知人によく似た名前の者がいる」と言葉少なく答えた。

ヴェイが何者であってどこから来たのかは知らない。シーニスはまだ本調子ではない彼にあれこれ聞くことを許さなかったのだ。彼が目覚ましてから三日が過ぎる。

名前以外何も知らない銀髪の男と一緒に暮らしている。

「そうそう、これ、僕から差し入れ。家でとれた卵と野菜」

「ああ、助かるよ」

「シーニスによろしく伝えてね」

「寄っていかないのか？」

「うん……彼がいるからね」

ラルドは複雑そうな表情で肩をすくめて見せた。

多分、父親に行くことを止められているのだろう。なんだかんだ言って逆らえないのだ。

ユーリは頷いてもう一度礼を述べた。

彼と別れてユーリは再び家に向かって歩き出した。正直気が重い。よそ者である彼がこの村に留まったところでもろくな事はない。甘い顔をして長い間保護をしていれば村の人間に嫌味を言われ、姉弟の立場も随分と悪くなってしまう。自分はいい。剣の才能があるから、手放したくない村人は面と向かって悪くは言わない。

だが、シーニスの方は酷いものだ。彼女がこれ以上嫌な思いをするのは避けたかった。

だから早くヴェイを追い出したかった。

「ただいま」

「お帰りなさい、ユーリ」

シーニスに出迎えられ、ヴェイには目だけで挨拶をされた。

ユーリはシーニスにラルドの差し入れを差し出す。

「これラルドから。卵と野菜だってさ。ただでさえ大変なのに、一人増えているだろう。正直助かったよ」

「ユーリ、またそんなことを……」

「事実だろう？ 大体姉さんは甘過ぎだってーの」

「困っている人に優しくして何がいけないの？ みんな助けてくれるんだから、問題ないじゃない」

みんな、と言われて苦笑する。

助けようとしてくれるのはラルドとジェルドくらいだ。あとはお節介焼きのおばさん連中が自分の不利益にならない程度に声をかけるくらいのものだろう。

そんなの助けなんて言わない。

「シーニス、私は構わない」

「だけど……」

ヴェイは真摯な瞳でユーリを見つめた。

「私は世話になってっている身だ。文句の言える立場にない。もう少し体力が戻ったのならすぐにでも出て行く」

「そうしてくれるとありがたいな」

「ユーリ！」

責める彼女の声を無視して自分の部屋に入る。

姉は甘すぎる。

だからいつも損な目にばかり遭う。

腹立たしくて仕方ない。

（それにしてもあいつ……相変わらず凄い目）

彼が目を覚ました時には驚いた。

ヴェイの目は髪の毛と同じ銀色をしていたのだ。

髪の毛ならば染めれば済む。しかし瞳ばかりはごまかしが利かない。

彼の瞳は星を散らしたような美しい色をしていた。まるで銀の結晶を見ているようだ。

あの目に見据えられると泣きたくなる。

心が何かに揺さぶられたように激しく痛むのだ。激情的な感覚に襲われる不思議な瞳。あんな目を、あんな髪を見たのは生まれて初めてだ。

出会ったのがここでなければどんなに良かっただろう。壁にもたれ、目を閉じかけた時、妙な気配を感じる。

「！」

ユーリは剣を強く握りしめ部屋を飛び出した。

驚いたようにシーニスが見る。

「どうしたの？」

「魔物の気配だ！ 多分村の中にいる」

「え？」

「二人はここにいろ。絶対に外に出るな」

言うだけ言ってユーリは飛び出した。

村の周りは紋章術の結界が張られ、魔物は近付いて来られない。だが、紋章術の力が弱まればその隙を狙って魔物が中に入り込んでくる。こんな事が起こったのはユーリの知る限りでは二度目。

父が命を落としたあの日以来の事だ。あの後村長が紋章師を呼んで結界を治したはずだ。あと数十年は持つはずなのに、何故。

ユーリは街の広場へと出た。

既にそこは恐慌状態に陥っていた。

入り込んだ魔物は……数え切れない！

「ユーリ！」

「……ジェルド、みんな避難させろ！」

「俺もやる。お前一人じゃ無理だ」

「頼む、誘導してくれ、俺の剣にみんな巻き込まれる！」

村の外ならいい。

だが村の中で戦うのは初めてだ。自分の剣の威力がどれほどあるのか分からない。木だってなぎ倒すことが出来る威力だ。戦う術を持たない人を巻き込めば傷つけてしまう。

ユーリは剣を抜く。

魔物達がユーリの放つ殺気に気付いたように一瞬固まった。

刹那。

ユーリの後方に人の気配を感じる。

「援護を」

低い声。

一瞬誰なのかが分からなかった。

「ヴェイ？」

彼の瞳は赤く染まり、瞳孔が黒く収縮している。頬には赤い、見たこともない紋様が輝いていた。

その赤い紋様はやがて薄緑色の紋章へと変化を遂げる。同時に彼の瞳の色が瞳孔だけを黒く残して元の銀色に戻る。

薄緑の紋章は見覚えのあるもの。

父の持っていた古い本の中に出てきた力のある紋章。

「……雷撃の紋章」

空が俄に曇った。

村の上空に雷で作られた輪が出現する。

一瞬だった。

その輪が強い光を一瞬だけ発する。

ぱりん、と何かが砕け散るような音が聞こえた。

「!!!!!!」

耳に届かないほどの鋭い音を立てて稲妻が堕ちる。それは器用に魔物だけを狙い、空を飛ぶ魔物達が一気に叩き落とされる。

「凄い」

ユーリは自然と微笑んだ。

身体が今までにないくらい興奮する。やれる、戦える。村を守りながらでも彼と一緒にであるのなら戦える。

雷を浴びてなおも生き残った魔物達を切り捨てながら、ユーリの意識はヴェイに向いていた。

絶対的な強さを持った男。

冷静に、そして、的確に術を使う。

こんなに強い相手に今までであったことがない。剣や腕力ではない、別の強い力。今まで魔物に剣を振るってきた時の高揚感とは別の種類の興奮がユーリの中を駆けめぐった。

何匹目かの魔物を切り捨て、ようやく街の中が静かになった。

ユーリは剣先に付いた血を払うのも忘れ彼の姿を探す。

早くヴェイと話がしたい。

ユーリは興奮した面持ちでヴェイに近付いた。

村の中が先刻とは違った風にざわめいているのを感じ取ったのは、ヴェイに向かって口を開き掛けた時だった。

遠巻きに、ヴェイを見ながら口々に何か囁いている。

それは怯えとも恐怖ともとれる言葉。まるでヴェイが魔物を招き入れたと言わんばかりの態度だ。

ユーリは苛立った。

違う、彼は魔物を招き入れた訳ではない。

だって彼は……

「その人は紋章師じゃよ」

「長老！」

杖をついた老人が、人の波を抜けてゆつくりとヴェイの方に近付いてくる。

老人は観察するように眉を上げる。ヴェイは黙ったまま見返した。その瞳の瞳孔は既に元のように戻り、頬にあったはずの紋章も消え失せている。

「まずは礼を。村の者がそなたの術に助けられたようじゃ。ぬしが姉弟のところで世話になっているという御仁かね？」

「あなたは、この長老殿か」

「いかにも。紋章師殿、生まれはどこかね」

「ロウだ」

ほ、ほ、と老人は笑う。

「やはり良い血筋をお持ちのようじゃの。見ての通りこの村の紋章術は崩れてしまった」

ヴェイは頷く。

「おそらく以前にここに紋章を刻んだ者は一族から離れた裏紋師だろう。術が未熟故、崩れやすい。迷惑でなければ私が刻み直そう」

長老は感謝するように頷いた。

「ほんに助けられてばかりじゃ。ジェルド、この方をほくらまでご案内しなさい」

「あ、はい」

呆然と立ちつくしていたジェルドは慌てて頷く。

代替わりしたものの、元々は村長だった人だ。長老の言葉に逆らうものはそういない。

「ユーリ、おぬしは儂と共に来なさい。少し話があるからの」

事態が事態とはいえ考え無しに村の中で剣を振ってしまった事だろうか。ユーリは静かに頷いた。

「はい」

ちらりとヴェイを見上げると、彼は少しか口元を緩ませた。それをみてユーリは一瞬呆然とした。

笑ったのだろうか。

だとしたら何故？

村人達が先程とは違った目つきでヴェイのことを見ていた。

それは畏怖と敬意の入り交じった瞳。自分に向けられる視線によく似ている。貪欲なまでに利用しようとするような浅ましい表情。そのくせ、怯えて自分から滅多に近付いて来ない。

嫌な感じがした。村の人間達が酷く卑しい生き物に見える。

シーニスさえ首を縦に振ればこんな村、今すぐ出て行ったのに。

三話　＜　＞を尋ねる男

紋章術は、力ある者が紋章を刻むことによって初めてその力を発揮する。紋章を正しく刻み込むことの出来る人間を紋章師と呼ぶ。

原理は分らないが、街や村の周囲に紋章を刻むと結界が張られ村に魔物が近付かなくなる。同じように身体のだこかに対応する紋章を刻み込めば人間でも魔族や竜族と同じように簡単に魔法を使えるようになる。

ヴェイの雷撃はその紋章術によるものだ。術を使う時だけ紋章が現れるという話は聞いたことがなかったが、あの時ユーリの見た紋章はまさしく雷撃の紋章であった。

彼が紋章師である事は疑いようがない。

その上、彼は。

「ユーリ？　どうしたの、ぼうつとして」

「あ……」

声を掛けられユーリははっとした。

今、食事をしていることによく気付く。ヴェイやシーニスの食事はもう半分が終わっていた。対して自分はただ繰り返しスープをかき混ぜているだけだった。食事も全く進んでいない。

「な、何でもないよ」

ふう、とシーニスが溜息をついた。

「あなた、本当はヴェイに謝りたいんじゃないの？」

「謝る？」

「散々酷いことを言ったじゃない。あの一件で反省したのだと思っただけど？」

「そんなんじゃないよ」

ヴェイは長老の頼みを聞いてこの村に紋章術を施すと言った。それには数日かかる上に、強い紋章を刻むには日や風の影響も考えなければならないと、暫く滞在することになった。

今村のほころには仮の紋章が刻まれている。

仮とはいえ、彼の行う紋章術は完璧だった。村の方に近付いてくる魔物の数は激減した。それどころか怯えたように街の近くにすら来ない。それは彼の能力の高さを如実に表していた。

村の人間は本来大金が必要な事無償でやってくれるヴェイに喜び、彼が滞在することを悪く言うような人はいなかった。

けれど、ユーリの気持ちは変わらなかった。

「俺は、まだ出て行って欲しいって思っている」

「どうして？ ヴェイがいても困ることなんてないじゃない」

ユーリは皮肉っぽく笑った。

「この村で、よそ者、と暮らしたって良いことなんかないんだよ」

「！」

怒ったようにシーニスが立ち上がる。

食事を続けたまま彼は静かに言った。

「……仕事が済めばそうしよう」

「ヴェイ！」

「悪いけど、そうしてくれ」

彼の方を見ないようにしてユーリは食事を始めた。姉はまだ何か言いたそうな素振りを見せていたが、これ以上話しても埒があかないと思ったのだろう。椅子に座り直して食事に戻った。

無言の食事が続く。

本当に、早く彼がこの村から出て行ってくれればいいのに。

「ユーリちゃん」

呼び止められてユーリは顔をしかめた。

小さい規模の村だから、ほとんどの人間の顔を知っている。だが、全員と話したことがあるわけではない。ユーリを呼び止めた女は村長の家の近くに住む女で、今までに話したことなどなかった人だ。

むろん「ちゃん」付けで呼ばれるほど親しい訳ではない。

小走りに走り寄ってきた女は、他の人にそうするように天候に関する話題から入った。本題はそんなことではない。ユーリは乾いた目線で女を見下ろした。

ところで、と女は話題を変えた。

「家の畑、最近土壌が悪いらしいのよ」

「ああ、そうなんですか」

「それで、その……何か土を良くする紋章術ってないのかしら」
きた、とユーリは唇を噛む。

土壌を良くする。彼女はまだマシな方だ。今までも何人かこうしてユーリに話しかけてきた。産まれた子供に祝福の紋章を、家に害虫が寄りつかない方法はないか、病気を治す方法はないか。そうであれば紋章術を万能な錬金術と勘違いした奴が、お金を呼び込む方法は、家が繁栄する方法は、長生きするためには。

欲望の塊。

聞く度に嫌になる。

彼らは自分たちで何とかしようなんて考えていないのだ。

そしてそれを話題にした後の言葉は決まっている。

「その、ヴェイさんに聞いてみてくれないかしら」

ユーリは拳を握りしめる。

爪が深く手のひらに食い込んだ。

むろん紋章術でなければどうしようもない問題もあるし、その方がずっと効率の良いことだって知っている。でも、彼らは考えていない。ただその小さな望みを叶えてもらう事が、この先どんなことに繋がるかなんて少しも考えていないのだ。

それに、

「んなこと、自分で聞きに行けばいいじゃんか」

「……！ ジェルド？」

一瞬、口に出してしまったのかと思った。

驚くユーリをジェルドは後ろから抱きしめるようにして顎を頭の

上に置いた。

「お前らこいつに頼りすぎなんだよ。そのくらいの事、直接聞けば良いだろう？」

「だけど、ほら、一緒に暮らしているんだから……」

「だから何だよ。こいつは伝言板じゃねえ。御仁が怖いなら遠巻きで見てる。直接頼む根性もないくせにごちゃごちゃいつてんじゃねーよ」

正論でつつかれ、女は言葉を失った。

言いたかったことの半分くらい、ジェルドに代弁してもらったようだ。握られていた拳が少し緩んだ。

「こいつも仕事があるんだよ。つーわけで、邪魔すんなよ」

さあ、行こう、とジェルドに促され、ユーリは歩き始める。追うようにジェルドに対する罵倒語が聞こえてきた。

ジェルドは少しすまなそうにユーリに向かって片目を瞬かせた。

そう言えば彼女はジェルドの親類だ。元々オミオスは小さな村。元を辿れば全員が血縁関係がありそうな程に血が近い。よそ者の子だと陰口をたたかれる姉弟すら血縁関係に当たるのだ。

だからここでジェルドが気にする必要はない。

彼は複雑な気持ちで笑みを返した。

「助かったよ」

「お前も大概お人好しだよな。遠慮しないでガンガン言っちゃえばいいのに。やっぱシーニスが気になるのか？」

少し迷って、うん、と頷く。

「姉さんは、この村で暮らしたがっているから」

「あいつアレで強情な所あるからなあ。……で、御仁の方は？ あんな強力な紋章術使って平気だったのか？」

にやけたような、ふざけているような表情だったが、声音には真摯なものが混じっている。お義理でも何でもなく本気でヴェイの体調を慮っての言葉だからユーリも真面目に応えた。

これが他の誰かなら適当に応えていたかもしれない。

「紋章術を使うのは平気そうだよ。多分、あの人は息をするより自然に紋章術を使う」

彼が紋章術を使った時、自分と同じ気配を感じたのだ。

自分がそれそのものになってしまったような感覚。紋章術と剣では違いがありすぎるけれど、同じ感情を共有できるのではないかと思っただのだ。誰に話しても分かり合えなかった感覚を理解し合えるのだと思っただのだ。

だけど、それはできない。

「体調の方は大丈夫そうだ。でも、何か落ち込んでいる風なんだ」

「落ち込んでいる？」

むしろ絶望していると言うのが正しいだろうか。

無表情だから、物静かだから言うんじゃない。それは多分彼本来の性質だ。

そうではなく、彼は自分の置かれた境遇に絶望しているように見えるのだ。心の深い部分が傷ついて、もう二度とそれを開かないように深く閉ざしてしまったような気がしていた。

だから穏やかなのだ。表面だけは穏やかに見せている。

「オミオスに流される前に何かあったんだろうな。俺には聞く権利無いけど」

出て行け、と言い続けるこの口で彼の過去を聞けるわけがない。

ジェルドは軽く首を傾げる。

「そうか？ 俺はお前が聞くべきだとおもうけどなあ。だってお前、誰よりあいつのことを考えているだろう？」

「俺は、俺と姉さんのことしか考えてないよ」

「どーだか」

不満そうに息を吐く。

「いっつも思うけどお前ってさ」

そこで彼の言葉は途切れた。

彼の視線はユーリを通り過ぎどこか村の入り口辺りを見つめている。まるで何か信じられないものを見るかの表情。ユーリもまたそ

の視線を追って硬直した。

村の入り口には少年が立っていた。

淡い水色の髪。横は少し長く、後ろは短く刈り込まれている。瞳は輝くような金色をしていた。首から肩にかけてうす茶色の領巾を巻き付けているが旅人という印象も武装している風もない。背が低い子供だったが、威圧感を感じさせる少年だった。

そこにいるだけで圧倒的な重圧感を覚える。そのためか、幼く見えるはずの顔立ちも不思議と大人びたように見える。ヴェイとはまた違う不思議な雰囲気を感じていた。

一瞬早く硬直が解けたジェルドは剣に手を掛けた。

人には無い色を持つ者。人型をしている魔物かも知れない。

やや遅れてユーリも剣に手を掛けた。

少年の姿をした男はにこりと笑みを浮かべる。

「驚かせてしまったようなら謝るよ。この村の人に何かするつもりではないから、安心して」

「お前は、一体……」

「僕はリヒト。人を訪ねて来たのだけど」

彼は全く毒気の無い顔で笑む。

何者なのか、信用して良いのか判らない。だけど、悪いものだという印象は不思議と受けなかった。

二人は顔を見合わせ、再びリヒトと名乗った男の方を向く。

彼は少し首を傾げて問う。

「この村にく　　>はいる？」

四話 竜族の王

「この村に＜ ＞はいる？」

問われ、ジェルドは顔をしかめた。

少しむっとしたようにユーリが応える。

「何の用ですか？」

「無事を確かめたかった。それと、少し話がしたくてね。強い紋章師がこの村にいるという噂を聞いてね、あるいは＜ ＞ではないかと思ったんだ」

ジェルドは首を傾げてユーリを見る。ユーリは少し困惑した様子で彼の様子を窺っていた。

「その様子だと彼はここにいるんだね？ 僕は＜ ＞と共に戦っていたいわば戦友だよ。彼の元まで案内してくれないかな？」

「あんた、さっきから誰の事を話しているんだ？ 名前が上手く聞き取れないんだが」

「？」

ユーリは不可解そうに彼を見上げた。

彼の耳が悪いなんて話を聞いたことがない。同じ距離で何度も名前を呼んでいるのだからユーリにだけ聞こえてジェルドには聞こえないなんてことはないだろう。聞き逃したにしてもおおよその発音ですぐに見当が付きそうなものだ。

ああ、とりヒトは声を上げる。

「そうか、ヴィルナーと言えば分かるだろうか。それとも彼はヴェイと名乗っている？」

「さっきからそう呼んではいませんでしたか？」

問い返すユーリにリヒトは目を見開く。

「君、そう聞こえていたの？」

「どういう意味ですか？」

「驚いたな、君には特別な血が流れているようだ」

特別な血、と言われてユーリはうつむいた。

この村の人ではない彼にまで「よそ者」と言われているような気がした。

呆れ声でジェルドが言う。

「おいおい、あんたいきなり失礼じゃないのか」

リヒトが少し意外そうに言う。

「気にしていたのなら謝るけれど、その血は誰かに恥じるようなものではないよ」

ジェルドは一瞬ぽかんとしていたが、やがてにいつと笑いを漏らす。

「何だ、あんた良い奴じゃねーか。ユーリ、御仁の所まで案内してやろうぜ？」

ぽん、と背中を叩くジェルドをユーリは少し恨めしそうに睨んだ。リヒトが何の目的でヴェイに会いたいのかわからない以上、彼に人を近づけたくは無かった。話がしたい、戦友だった。そんなことを信じてヴェイやその側に付いているシーニスまで危険に巻き込むような事になったらどう責任を取るというのだろう。

悪い人に見えない人間がすべからくい人とは限らないのだ。

お前はいつだって調子がいい、そう言いかけた時、リヒトが戸惑ったような声を上げる。

「ユウ、リィ？」

「え？」

「君の名前、ユウリィっていうの？」

その反応は、ヴェイがユーリの名を聞いた時と同じだった。酷く驚いて、とても信じられないという風に瞬く。ヴェイの知り合いということとはリヒトもその「ユウリィ」という人物のことを知っていたもそれほど不思議はない。

だが、似た名前と言うだけでここまで驚くのは何故だろうか。

「俺の名前はユーリです。……そのユウリィって誰ですか？」

一瞬彼は遠い目をする。

「僕らの、仲間だった子だよ」

「だった？」

ジェルドが聞き返す。

何故わざわざ過去形にするのかは想像が付く。

仲間だったが、裏切った。若しくは、今はもう、この世にはいない。

どちらにしても彼の表情を見ていれば気持ちのいい話では無さそう。その人物と似ている名前だから、ヴェイもリヒトも驚いた。だけど、この表情はそれだけの事だろうか。

腕組みをしてジェルドが再び問う。

「だった、ってどういう意味だよ？」

「死んだという意味だ」

突然声が聞こえてぎくりとする。

振り返るといつからそこにいたのかヴェイとシーニスの姿が見える。二人とも紙袋を抱えているところを見ると、シーニスの買い出しにヴェイがつきあったようだ。あの紋章師に荷物持ちをさせるのは彼女くらいだろう。誰に対しても平等であるのが彼女の良いところだが、限度があるだろうとジェルドは呆れたように肩を竦め、ユーリは蟀谷を指で押した。

静かな銀の瞳の男は紙袋をユーリに押しやり、頭二つ分くらい身長の高い男の前で膝を折って挨拶をする。

「遠路遙々のお越し、痛み入ります。竜王陛下」

「りゅっ……！」

「竜王陛下？」

一同は驚いてリヒトを見た。

水色の髪の子はその言葉を否定せずに笑い、ヴェイの前にしゃがみこんだ。

「君がく　>の名を継いだ時、僕らは対等であるって言ったはずだよ。そんな風に僕にへつらう必要はない」

「戦は終わりました。私はその名を捨てています」

「調子狂うなあ、僕に対して品位が足りないとか竜王らしくないとか、散々暴言吐いていたの誰さ？ 大体人間に名前が聞こえないのだからその名前はまだ君のものなんだよ。少なくともかの王はそう思っているはず、違う？」

「……」

リヒトは苦笑いを浮かべる。

「何その真面目っぷり。ティアアなら絶対怒り出しているよ。……

あー、もう、面倒っ！」

少年が男の眼前に指を突きつける。

「命令だよ、それ止めて」

柔らかい口調で言われてヴェイは頷いて立ち上がる。

君たちも、と竜王は言う。

「僕に変な気を遣うのは止めてよ。竜王になったのはたまたま僕以外の適任者が命を落としただけのこと。それに今は竜王としてではなくリヒトとして彼を訪ねてきたのだからね」

「……マジで竜王なのかよ」

「一応これでもね」

彼は屈託のない笑みを浮かべる。

髪や瞳が人間の持たない色であったのも彼が竜族であるという前提で言えば不思議ではない。人の姿になってはいるものの、彼らの本質は竜だ。妙な威圧感のある彼が竜王というのは何となく納得は行く。

だが今日の前に竜王がいるのだと思うと俄に信じがたい所があった、

一目見ようと思ったのであれば何かの式典や彼の指揮する戦争に兵として加わればあるいは遠目から見ることが可能だろう。だが、まさかこんな形で竜王に会うとは思ってもみなかった。

しかも、こんな辺境の村で。

「……シーニス？」

ジェルドが彼女を呼ぶ。

ユーリもようやく彼女が呆然としているのに気付いた。彼女は呼びかけられると顔を真っ赤にさせた。

「え？ あ、ごめんなさい、突然竜王陛下がいらっしゃるから動揺しちゃって。あの、私、家にもど……きゃあ」

戻ると言いかけて、彼女は足を滑らせる。

「シーニス！」

ばらばら、と彼女のもつ紙袋からこぼれ落ちる。

青く茂った草原に真っ赤に染まったリングが転がった。

彼女の腰に手を回した男の銀髪が優しく揺れる。誰が動くよりも早く反応をしたヴェイに支えられ、転倒を免れたのだ。

シーニスは更に顔を紅潮させた。

「あつ、ご、ごめんなさい」

「怪我は、ないか」

「ええ、大丈夫。ヴェイが、支えてくれたから」

元々、シーニスの運動神経は鈍いところがある。緊張と動揺で慌てたのだろう。転がったリングを拾い集めながら彼女はふう、と溜息をついた。

御仁の一人勝ちか、とジェルドがつまらなそうに呟く。

ユーリは自分の胸元をぎゅっと握った。シーニスが怪我をしなくて良かったと思うが、何か嫌な感じが胸をよぎった。

それに思い当たる節があって余計に嫌な気分になった。

父親が戦死して以来、姉弟は長く二人きりで暮らしてきた。ジェルドやラルドのように、助けてくれる人もあったがほとんどの時間を二人で過ごしてきた。

だから分かる。

彼女の心の変化を。

高圧的で怖い印象さえ受けるヴェイ。だが、彼は優しい。みんなに気を遣うシーニスだから、人をきちんと見る。彼に冷たい態度を取るユーリでさえも彼の優しさには好感を持っていた。彼女がヴェイを見て、その優しさを知って好意を持たない訳がない。

その好意は、ユーリが彼に対して抱くものと別の感情も孕んでいる。

その感情には過ぎた日数など関係がない。彼女もまたそれを認識し始めている。

けれど、ヴェイは？

深く感情の閉ざされている彼は？

彼女の気持ちを知ってどう反応を示すだろうか。

そしてその深い感情はきつとシーニスを傷つける。彼女がヴェイに惹かれるのは当然だし、構わない。だけど、それで傷つくのならば。

ぐん、と突然何かの強い気配がした。

ヴェイが素早くシーニスを庇った。

ユーリとジェルドは剣を構え、竜王は上空を見上げる。

「……彼女だ！」

目に見えて分かるほど上空の大気が変化した。

紫色の鋭い魔力を帯びた空間がまるで引き裂かれるように開かれる。

怒りにも似た赤い気配に包まれて、上空に一人の女が現れる。赤銅色の髪、それよりも明るい赤い瞳。全身を黒い法衣に包んだ彼女の額には光を帯びた瑠璃色のサークレットがはめ込まれている。

気配は明らかに人ではない。

いや、姿形だけを見れば普通に人間のように見えるだろう。だが彼女の纏う気配は人のものではなかった。

彼女の現れた空間から強い力と共に叩き付けるような風が吹き出されている。

女はゆっくりと辺りを睥睨した。

その視線はリヒトを見、その隣に並ぶジェルドやユーリを認め、やがてヴェイの元で静止する。

瞳の奥が激しい怒りの色に燃えた。

「……見つけたぞ、＜スウ＞・ヴェイナー！」

女の瞳は怒りの色で支配されていた。

上空の空間は、彼女が地上に降り立つとすぐに気配を消したが、彼女の周りの強い気配は止むことは無かった。

「ティアー！」

咎めるようにリヒトが叫ぶ。

その声は彼女には届いていないようだった。彼女はヴェイに近付くと怒りの表情を浮かべたままその襟首をつかみ上げた。

「貴様、何故勝手にいなくなった！」

「魔王」

「ティアーと呼べと言っているだろう！ 貴様何故、ロナ・ユウリイを殺したのだ！ 答えろ！！」

噛みつくように吠える女はまるで炎のようだ。

勢いに驚き、その言葉の意味を理解するのに少し時間がかかった。

「殺した？」

ぽつり、とヴェイの後ろでシーニスが呟く。

ティアーの瞳が初めてその姿を認識し、驚いたように見開かれた。

「殺したって、どういう……」

ぐらり、と彼女の身体が揺らいだ。

「シー……ニス？」

力が抜けるように彼女の身体がヴェイの背を撫でるように落ちる。ぱたり、と音を立てて彼女の身体が地面に落ちた。

「シーニス！！」

叫んだのは自分だろうか、それともジェルドか、ヴェイか。

ユーリにはそれすらも分からなかった

五話 輪廻

「すまない」

シーニスをベッドに寝かしつけると、赤髪の女が頭を下げる。

先刻の怒りの表情からうって変わり、やるせない顔で頭を下げる女は、リヒトとヴェイの話によれば「魔王」なのだという。現れた時の様子を見ればそうと疑わないが、今日の前にいる女は少しばかり気位の高い風の女性にしか見えない。赤銅色の髪も、燃えるような瞳も、珍しい色ではあったが、人にその色が出ないわけではない。取り巻く気配を見ても、今の彼女はとも魔王には見えなかった。「謝らないで下さい、私なら大丈夫です」

ベッドの中でシーニスが答える。

強すぎる魔力や感情はシーニスのような敏感な人間には時として害になってしまうのだ。ヴェイを追い彼に対して強い怒りを抱いていた魔王の感情を、間近にいた彼女が拾ってしまった。

元々身体の弱いところのあったシーニスは倒れてしまった。

（それだけのことだ）

ユーリは言い聞かせるようにぎゅっと拳を握る。

眠っていればすぐにでも良くなる。

彼女は大丈夫なのだ。

そう自分に言い聞かせる。

「お前達にも迷惑をかけた。すまない」

魔王はジェルドに向かって頭を下げた。

本当に彼女が魔王なのだとしたら、予測していたような人物とは随分と違う。ユーリは小さく息を吐いた。

「謝ることはねーよ。俺らは平気だ。ただ、旦那に美味しいところを全部持って行かれたから不満っただけだ。なあ、ユーリ？」

問われてユーリは頷く。

何事もなかったのだから、責めるつもりはない。けれど、今ユー

リが口を開けば彼女を責める言葉しか出てこないだろう。倒れたシーニスの前で争いたくない自分の気持ちをジェルドはよく分かっているのだ。

ユーリは彼に無言で感謝をした。

「ま、ただ、あれだけ派手にやったんだから、叔父貴たちに、姐さんか陛下の方から説明してくれると助かるんだけど。あ、むろん魔王魔王なんて話したら叔父貴たちぶっ倒れるかもしれねえし、その辺は伏せて説明頼むよ」

うん、とりヒトは頷く。

「そうだね。うん、早いほうが良い、すぐにでも説明に行こう。ティアー、十分冷静になっただろうけど、もう少し頭を冷やそう。いいね？」

「あ、ああ」

半ば強引に押し出されるように魔王が外に出、そのまま竜王も外に出た。最後にジェルドが「また後で」と軽い調子で手を振って出て行った。

三人が姉弟の家を出て行くのを見送って、部屋には沈黙が落ちた。元々ヴェイは無口な方だったが、今は増して無口に見える。

何と言葉を発して良いのか判らない様子だった。それはユーリも同じ事だった。

何を話して良いのか、何から説明を求めたらいいのか全く見当が付かない。

やがて沈黙に堪えかねたのか、シーニスが天井を見つめながら行った。

「……殺したって、どういう事？」

「私が、ユウリイを殺めたという意味だ。それ以上のことはない」

「ユウリイさんって、誰？」

「……………」

ヴェイは考え込むように目を閉じた。

「血の繋がらない妹だ。彼女は、私の妻となるべくロウに連れてこ

られた」

「？ ヴェイの一族は兄妹で結婚するの？」

シーニスの言葉にユーリが代わりに答えた。

「ヴェイは紋章の一族の王なんだ」

「知っていたのか」

長老に聞いた、とユーリは答える。

あの一件の後、長老は言った。ロウ、という場所は紋章師にとって聖地のような場所なのだ。そこで産まれた者で銀の髪、銀の瞳を持った者は王しかないのだと長老は言う。他の村人がロウという名前一つでは気付くこともないだろうが、彼がロウに産まれたことも、王であることも誰にも話してはいけないと長老は言った。

紋章師と言うだけであれだけ騒いだのだから、王と知れば村人はもっと騒ぐだろう。それを避けるべきだと長老は言った。

『もしも、万が一にも王であることが知れた時は、おぬしたちも村を出るのが懸命じゃろう。恥ずかしい事じゃがあれは……息子は利を一番に考える子だからの』

何故長老が紋章師にそれほど詳しいのかは知らない。

だが、長老は何かを確信していたようだった。

「紋章師の王族は強い血を守るために近親婚姻を交わすって聞いた。妹って体裁を整えたのは、周囲が反対するのを押さえる為なんだろう？」

ヴェイは頷いた。

「彼女は強い紋章術の力を持っていたが、私の血から遠かった」

「だから妹になったの？ でも、何でその妹さんを殺してしまったの？」

「言い訳をするつもりはない。妹を殺したのは事実だ」

きっぱりとした物言いが逆に言い訳のように聞こえた。

悔やんでも悔やみきれない事実。

多分、とユーリは思う。

彼はその妹の事を愛していた。いずれ結ばれる娘としてなのか、

それとも、純粹に家族となった人を慈しむことなのかは分からない。
ただ切ないほど愛していた。

それだけが切実に伝わってくる。

「……戦争が原因なのか？」

問うと彼は目を閉じる。

頷いたのだと分かった。

竜王達が借り出されたと言うあの戦。遠く離れたこの土地でさえ、
その噂は聞こえて来る。それほど大きな戦で、多くの血が流れた。

原因は何であるのか知らない。

戦があったという事実。紋章師達が戦ったという事実。そして、
冥王、魔王、竜王、精霊王がその終結に力を貸したと言うこと。そ
の程度のことしか聞こえてこない。発端は何であったか、それはこ
の村の誰も知らない。

尋ねるように視線を向けると、彼は小さく頷いた。

「発端は、そう、父王が禁忌に触れた事だろう」

「禁忌？」

「我々人間は死と輪廻に触れることは許されていない」

一瞬、理解に戸惑った。

死と輪廻。

ああ、そうか、とユーリは納得した。

ヴェイの父親は紋章術を使って人ならば当然訪れる死から逃れよ
うとしたのだ。死に直面した時、殆どの人間が抱いてしまう感情だ。
何故死ぬのか。死ななければならないのかと。普通ならばそれだけ
で終わる。だが、かつての紋章師の王はそれを実現させるだけの力
と知識を持っていた。

そういう事だろう。

「少なくとも冥王は許さなかった。だから子である私に王を滅ぼす
ことを命ぜられたのだ。それでも私は慈悲をと願わずにはいられな
かった。冥王は私の願いを聞き届け慈悲の力を与えて下さった。私
はその力で父王を殺し、玉座に就いた。だが、禁忌の術は裏切り者

達の手によって持ち出された」

「……まさか」

嫌な予感がした。

妹を殺した、その意味が分かった。

「裏切り者は王である私が処分する他になかった。もう既に輪廻の歪められた者が世界を歪め始めていた。竜王と魔王に助力を請い、私はレキイに籠城した紋章師達全てを滅する事に専念した。……その中に、彼女の姿があった。それだけのことだ」

何てこと、とシーニスは顔を覆った。

ユーリもうつむいた。

愛おしい人を手に掛ける。ユーリならばシーニスを殺すということだ。それはたとえ話でも苦しくなる程の事。それをヴェイは経験してきた。

ただ誰かに事実を報告するだけの淡々とした口調が逆に悲しかった。

彼がここに来た時から思い詰めたような表情を浮かべているのはこのせいなのだ。ユウリイという存在が彼を苦しめている。

「何故、お前達が泣く」

「だって、あなたが……」

嗚咽が混じり、彼女の言葉はそこまでしか続かない。

ユーリが後を引き継いだ。

「あんたが、泣かないからだろ？」

自分たちが泣くのは違うと思う。

当事者ではない自分たちが泣くと言うことは同情でしかない。

けれど悲しかった。

泣かない彼が。

押しつぶされそうな心をしているのに、弱いところを見せない。いや、見せられないのだろう。こんな村に流されてもなお、王としていることしか知らない男。

今聞いただけの事では無いはずだ。あの出来事はほんの一部分。

ただ二人に事実を伝える為だけの説明に過ぎない。

もっと、彼は経験してきたのだ。

一体いつから、どんなことを感じていたのだろう。

いつから自分の感情を押し込めることを覚えたのだろう。

ユーリは自分の肩を抱いた。

指先が皮膚に食い込む。

「最初から分かっていたよ。あんたが何か辛い経験をしてきたって。だからあんたにこれ以上嫌な想いして欲しくなかった。村の人に何か言われたり、利用されたり。そんなの、見たくなかった」

自分は戦う事しか知らないから。

剣を振るう力はあっても、守れる力も、支える力もない。だから、せめて汚いものを見て人に失望する前に、ヴェイには村を出て行って欲しかった。

「あんたは、姉さんと同じなんだよ。何で、優しい奴ばかりが損をしなければいけないんだ」

損をしている。

そう思うのに彼らはなおも優しい。気にすることは無いのだと笑う。

自分には負担を軽くすることは出来ない。自分の無力さがもどかしくさえあった。腕ばかり強くても守れないのなら何の意味もない。

せめて半分でも彼らの荷物を背負えたなら。

せめて、傷つかないように出来たなら。

本当にそれだけでいいのに。

少し迷ったようにヴェイの手が伸ばされ、ユーリに触れる直前で

下に落ちた。

「お前は優しい子だ」

「違う、俺は優しくなんか無い」

シーニスのため、ヴェイのため、そう言うが結局自分のためだ。

自分が彼らの苦しむ姿を見たくないからそうしているだけ。

その結果、何も出来ないのなら、自己満足にもならない。

僅か、ヴェイが微笑んだ。

不器用な笑み。

多分、こんな風にちゃんとした微笑みを見るのは初めてだろう。

「私は、その気持ちがあれば……十分だ」

言葉が悲しい。

何故この人は自分の運命を呪わないのだろう。何故まだ人に優しくいられるのだろう。経験したのが自分ならばとうに心がくじけてしまっている。

人に優しい言葉なんかかけられない。

ユーリは目元を覆う。

涙は流したくない。泣けばかえって彼らが気を病む。

もうとっくに知られているだろうが、その姿を見られたくはない。

「俺、少し、風に当たってくる」

踵を返して出入り口の戸を開いた。差し込む光と空気が清浄すぎて呼吸が出来ない。涙が瞳を塞いだ。吐き気のような激しい嗚咽が喉を塞ぐ。

大声で叫びたかった。

大声で泣きたかった。

ヴェイの辛い事実を知ってしまったから？

彼が涙すら流せないのが悲しいから？

（違う）

扉を閉めて、家の前に蹲る。

激しい感情で立っていることすら出来なかった。

（俺は……無力だ）

力が欲しい。

剣を振るって戦う力ではなく、彼らのような人を支えられる力が欲しい。心の強さが欲しい。もう少し、頭が良ければ。せめてもう少し年齢が上ならば。せめてもう少し経験があれば。もっとちゃんとした言葉をかけられるのに。

こんな風に、自分に嘆いて泣くこともない。

どうしたらいいのか分からない。

どうしたらヴェイの助けになるのだろうか。

まだ成人していない十六という年齢。それすらも疎ましく思える自分が、たまらなく卑しく思えた。

六話 約束の紋章

声を殺して泣いた。

奥歯を噛みしめて、誰にも聞こえないように泣いた。

涙を止める術は知っている。

考えなければ良いだけだ。

ユーリはゆっくりと息を吸い込んだ。吐き出すと、渦巻いた嫌な感情が頭から徐々に追い出される。二度三度くり返し、なおも流れる涙を袖口で拭いた。

泣いてなんかられない。

これから多分、村の中では騒ぎになる。ジェルドが付いているのだからヴェイが紋章師の王であることが知られる事はないだろう。けれど、竜族や魔族が彼を訪ねて来たと知れば怯えた村の人間が「出て行ってくれ」と言い出すに決まっている。

出て行くにしても、留まるにしても、ユーリが間に入って緩和しなければ言葉の刃が二人に容赦なく振り下ろされる。

泣いてなど、いられない。

自分が立ち上がらなければ支える事すら出来ない。

涙を拭って顔を上げると赤い髪が見えた。

魔王がこちらを見ていた。

慌てて立ち上がるユーリを見て、魔王はばつが悪そうに視線をそらせた。

「あ……リヒトさんと、一緒に行ったんじゃないんですか？」

声に剣呑な色が混じったのは泣いているところを見られたせいだ。こんな所、誰かに見られたくはなかった。

ティアーは口ごもる。

「いや、その、ここで頭を冷やせと言われて……」

自分が行ったところで喧嘩腰になってしまうのだから、と彼女は続ける。

ユーリはぎこちなく笑った。

その笑みを見て、彼女も少しほっとしたような不器用な笑いを返した。

「ユーリ殿と言ったか」

殿、と呼ばれるのは奇妙な感じがした。

相手が魔王だからと言うよりは、純粹に呼ばれ慣れていないためだろう。まして女の人がこんなにぞんざいなしゃべり方をするのも初めてだった。

ユーリは「はい」と頷いた。

「名だけではなく、どこか彼女に似ている。＜スウ＞があれほど穏やかな理由がよく分かる。行方知れずになるまではもう死んだような男だったからな」

彼は彼女が特別な言葉で名前を発音している事に気付かなかった。リヒトと同じように＜スウ＞と呼ぶ彼女の声は、ユーリの耳には「ヴェイ」という名で届く。本来その言葉は創始の言葉に属するものだ。魔族の彼女にしてみれば普通の言葉だが本当ならば人間には聞こえない。竜王に言われ戸惑ったジェルドの反応の方が正しいのだ。

「出来ることならばあの娘を彼の手で殺させたくはなかった。＜スウ＞がいかに彼女を愛していたのか、分かっていたからな。絶望の淵に落としてしまったのは我々が原因だ」

先刻ヴェイを責め立てた時は、彼女はユウリイという女性を殺したことを腹を立てているように感じた。

しかし彼女は別のところで腹を立てていたのだと今分かる。憎しみではなく、そう選択させてしまった自分を責めているだけなのだ。彼女と自分はどこか似ている。

「あなたはユウリイさんのこと、よく知っているんですか？」

仲間だった、と彼女は言う。

「紋章師の戦いが始まった時、彼女はまだヴェイを助けていた。よもやあの優しい娘が奴を裏切り敵の将となるとは思っても寄らなかつ

た」

「……敵の将」

それは、ユーリが戦った魔物の軍勢の長がシーニスだったということだろうか。それはあまりに辛すぎる。

「ロナ・ユウリィは誰よりも<スウ>に尽くしていた。奴も彼女を愛おしく思っていた。同じ紋章師の王族として、共に戦っていた。だが、彼女は奴のように冥王の力で輪廻から外れてはいない。戦う事には限度があった」

「輪廻から外れる？」

「苛烈な戦の中では、人は弱い生き物だ。竜族のような強靱な肉体も、我々のような身を守る魔力も備えていない。奴のように冥王の力を借り、死なぬ存在にならなければ戦う事は出来ない。冥王は彼女に力を与えなかった。彼女は次第に前線から遠のいていった。」

ヴェイが死なない。

それは初めて聞いたことだ。驚いたが、それ以上に気にかかる事があった。

「……ヴェイは何歳ですか？」

「正確な年齢は知らぬ」

「戦いは、彼が冥王に力を授かってから何年続いたんですか？」

「覚えてはいないが、四十の年月は経過していたはずだ」

「それは……残酷すぎる」

戦う姿を見ながらも何も出来ないなんて。

一度でも戦場に立ち、戦ったことがあるのならば、思うように戦えない自分を嘆いただろう。大切な人が戦っていることを知りながら自分は何をすることも出来なかったのだ。それは彼女の心に深い闇を落とす事にはならなかっただろうか。

そして何より、彼女の外見年齢はヴェイを追い越していたのだろう。

男が思う以上に女は自分の老いを気にするのだ。いつ彼女が敵の側に就いたのか知らないが、ヴェイの年齢に近づくに連れて彼女は

どこか、おかしくなっていたのだと思う。

ユーリには彼女の気持ちは半分しか理解できない。けれど、もしもシーニスを残し自分だけが老いていたのであれば狂いそうになるだろう。一人だけ老いていく恐怖。そして置いていく恐怖。

それが多分、彼女を狂わせていったのだ。

「分かっているながら彼女は禁忌に手を出したんだ。そうしなければ
いられないほど、追いつめられていたんだ」

「ユーリ殿には分かるのか」

ティアーの問いに頷いた。

今までなら、何となくしか分からなかっただろう。そこまで思い詰めた彼女を理解しながらも、その心の弱さを嘲っただろう。だが、今はその気持ちがよく分かってしまった。無力さを実感し、自分ではどうしようも出来ないことを知った今なら彼女の気持ちがよくわかるのだ。

何かに縋らなければ立ち上がれない気持ちを。

目の前に力を差し出されてそれを受け取らずにはいられない気持ちを。その力が絶対で無いことを知りながらも、手を出さずにはいられなかった気持ちを。

「……ならば聞きたい。彼女は、ロナ・ユウリイは何故裏切ったのだ？」

「違います。裏切ったわけではない。ただ……選択を誤っただけ」

彼女は、共に戦いたかったのだろう。

ヴェイを支える力になりたかったのだ。ヴェイにしてみれば彼女が存在するだけで大きな支えだったのだろう。けれど、彼女にはそれが分からなかった。分かっていたとしても不安だったのだ。もっと彼の力になりたかった。

冥王に力を借りれなかった以上、彼女の目の前に残った選択は禁忌に手を出すこと。それは彼女自身危険だと理解していたはずだ。けれど、選んでしまった。

彼女は「敵」と呼ばれる側につく。そして王の妻に選ばれるほど

紋章術の才のあった彼女は当然のように上へ上へと押し上げられていく。そして最終的には降りられない場所まで祭り上げられてしまったのだ。

最後は自分でも何をしているのか分からなかったのではないだろうか。

追いつめられた彼女は自分をも失っていたのだろう。

「ユーリ殿は聡明であるな」

ティアーは微笑む。

ユーリは首をふった。

「何も知らないから、理解できるんです」

「……………」

不意に彼女が目を細める。

まるで眩しいものを見るかのようにだった。

「どうか、しましたか？」

「ユーリ殿の父君は何という名だ？」

「ソードです。ソード・コルドバード」

コルドバード、と彼女は確かめるように呟いた。

「ならば、ナイツという名に心当たりはないか」

一瞬考え込んだ。

すぐに出てこなかったのは一度か二度聞いた程度の名前だったからだ。何故彼女がその名前を口にしたのか訝しんだが、頷いて答えた。

「祖父の名前が確かそれだったと思います。俺が産まれるよりも前に亡くなりましたが」

「戦いで？」

「いいえ、確か寿命だったと聞いていますけど」

彼女の赤い瞳が驚いたように見開かれた。

そして、やがて悲しそうに瞳を伏せる。

「……………そうか、亡くなられたのか。人というのは、なんと……………
儂い」

祖父を知っているのか、ととても聞けなかった。

魔族である彼女は外見通りの年齢ではない。恐らく、ユーリの祖父と顔見知りであったのだろう。口調から察するに、仲が悪かったのではないと容易に想像が付く。だから余計に聞くことが出来なかった。

「ユーリ殿、手を見せてはくれないか？」

「はい？」

彼女はもう一度、手を、と言って促した。

迷いながらもユーリは手を差し出した。

彼女は差し出されたユーリの手に触れる。

魔王の手は、ユーリの手より細く小さかった。自分よりずっと長い歳月を生き、いくつもの戦いを抜けてきた手には見えない。頼りなくすら思えるほどの女の手だった。赤い髪と赤い瞳は彼女の苛烈さを表しているようなのに、その手は握りしめれば脆く砕けてしまいそうに思えた。

ガラス細工のようなその手がゆっくりとユーリの手の手甲を撫でた。膝きながらまるで君主を愛おしむように。

ぼんやりと、彼の甲に青い光が浮かび上がる。それは何か紋章のようだった。

浮かび上がった光を見て彼女は愛おしそうに笑う。

その微笑みが、女神のように美しく彼は戸惑った。

「約束を、守ってくれたか」

それは自分に当てた言葉ではないと彼は悟る。多分、祖父ナイツに向けられた言葉だ。答えずに見守ると彼女はユーリの手に優しく口づけをした。

ユーリは頬を紅潮させるが彼女の好きなようにさせた。

彼女の口からは睦言のような言葉が漏れる。緊張していたためか、ユーリには上手く聞き取れなかった。

最後の下りだけ、ようやくユーリの耳に届いた。

それだけが、ユーリ自身に向けられた言葉だった。

「ありがとう、ユーリ殿。よもやこのような場所で彼の子孫に会えるとは思わなかった。……あなたは、あの人によく似ている。私が何故ロナ・ユウリィに好感を抱いたのかようやく分かった」
救われた。

そう言うように彼女は微笑む。

祖父は、彼女にとって特別な人だったのだろう。それに似た雰囲気をもつユウリィが彼女は気に入っていた。だから裏切りも信じられなかったのだ。

どこで間違ったのだろうか。

これだけの人がお互いに想い合いながらも間違った選択をしてしまった。その結果、ヴェイが深く絶望をしている。

救えるだろうか。自分は間違わずに彼を助けられるだろうか。今、思っているのも、未来に自分がどんな選択をするのか分からない。

救いたい、と思う。絶望の淵から。

せめて支えになりたいと思う。

自分に、出来るだろうか。

魔王に触れられた手の甲には青い紋章が美しく輝いていた。

七話 その肩に背負うもの

リヒト達が戻ってきたのは深夜近くになってからだだった。

おそらく酷く長い間話し合いがされていたのだろう。疲れた様子のジェルドはリヒトを送り届けると短く「何とかなった」とだけ言い残し家に戻っていった。

少しうんざりした様子ではあったが、竜王はあまり疲れていないようだった。それは人間と竜族の体力の差だろう。同じく疲れた様子を見せない魔王とヴェイはその後朝までずっと何か話し込んでいた。内容の殆どが件の戦争の話だ。お互いに話切れない所があったのだろう。難しい国政関連の話から感情面の話まで色々な話が尽きることなく繰り返された。

時々、ティアアの声を荒げるのが聞こえたが、ユーリはそれすらも子守歌のようにいつの間にか眠りに就いていた。

ことごととスープを煮込む匂いでユーリはようやく目を覚ます。身体には誰がしたのか毛布が掛かっていた。

おぼろげに見回すとシーニスの影が見えた。

「姉さん、身体は？」

目をこすりながら真っ先に問うと、くすりと竜王が笑った。

「本当に君はお姉さん想いなんだね」

「えっと……リヒトさんおはようございます」

「おはよう。昨日は遅くまで悪かったね」

「いえ」

ユーリは気にすることないと示すように微笑んだ。

食卓にスープを並べるシーニスが明るく笑った。目が、少し赤いのは寝不足のためか、それとも昨夜泣きはらしたのか。どちらにしても今の彼女の表情は普段と変わらず優しいものだった。

「私の方は大丈夫よ。それよりあなたの方は？ 疲れていたみたいだけど」

「うん、平気。ヴェイとティアーさんは？」

「水を汲みに言ってもらったわ」

さらりと答えるシーニスにユーリは瞬いた。

「……紋章師の王と魔王に？」

「違うわ、ヴェイと、ティアーさんによ」

彼女は言い直す。

あくまでここに来ているのは個人的な知り合いと言いたいらしい。それにしたってヴェイはともかく魔王に水汲みをさせる者などこの世の中にそうはいないだろう。

ぶっ、とりヒトが吹き出す。

どうやら彼女は竜王にすら何か仕事を頼んだらしい。この大陸を統べる王に何をやらせたのだろうか。

「薪割りの仕事は面白いものだね。単調かとも思ったけれど案外と奥が深い」

「竜王が薪割り……」

ぼやくユーリの耳元でリヒトが面白そうに囁く。

「彼女、結構強かだね。僕は好みだよ」

本来ならば王の付く身分の人達に水汲みやら薪割りを頼むなど、無礼だと斬って捨てられても文句は言えない。彼女の行動でつい忘れてしまいうるようになったが、彼らは本当に身分の高い人達なのだ。いくら竜王が「気にするな」と言っても、これはいくら何でもやりすぎだろう。

普通に家を尋ねるお客様にだって十分失礼だ。

本当に彼らが温厚な人達で良かったと思う。

「……ちよつといいかい？」

リヒトはユーリの隣に並んで座る。

声を落としたと言うことは、シーニスにはあまり聞かれない事だろうか。ぐつぐつと煮える音と、薪が燃える音で、彼女の所に声は聞こえないだろう。ユーリ彼女の動きに注意しながら黙って頷いた。

「本当は彼を連れ帰ろうと思っていたんだ」

「え？」

「酷い顔をしていればね、城に連れ帰ろうと思っていた。彼ね、戦いが終わった後、海に飛び込んだんだ」

「……っ！」

ユーリは息を飲む。

リヒトは困ったような表情を浮かべる。

「正直、彼が死のうとしたのか、たまたま足を滑らせただけなのか知らないけれど、いくら輪廻から外れたと言っても長時間海に潜ってはいられないからね。慌てて精霊王が水と風の精霊達に彼を守らせて辿り着いたのがこの村だったんだ」

あの時のヴェイは酷かったのだと彼は言う。

まるで死の淵に佇んでいるように見えたと言う。

「元々無表情な奴だから、あんまり変わらないように見えるけど、あの時は周囲の人間が彼の感情に引きずられて自殺をしてしまうほど酷い状態だったんだ。それが、とっても穏やかな表情になっていた」

リヒトは優しい表情で笑った。

本当に、彼はヴェイのことを心配しているのだな、と伝わってくる。だから、少しでも穏やかな表情になった彼を見て喜んでいるのだ。

「こんな事、本当は頼めないのだけど、もう暫くここに置いてやってくれないか？」

「この村にですか？」

ううん、と首を振る。

「そうじゃない。君たちの家にだよ。僕らじゃ多分あんな風にヴェイを変えることは出来ない。……悔しいけどね」

正直、返答に困った。

ヴェイの傷が癒えるのなら、ここにいて欲しいと思う。けれど、ユーリ達の家があるのはこんな村なのだ。この村にいては彼の傷を

増やしたりしないだろうか。

せつかく癒えてきた傷を、心ない言葉で傷つけたりしないだろうか。

不安なのだ。

この村にいる事でユーリは沢山嫌な思いをしてきた。

同じ事をヴェイにも経験させることになるかもしれない。せつかく立ち直りかけているのに、また違うことで傷つけて今度こそ取り返しの付かない事になる。

その言葉から護れるだけの力は自分にはない。

心を閉ざしたまま永遠にも似た時を生き続けるのはそれは想像するよりも辛いことなのだろう。

「君は少し勘違いをしているよ」

「勘、違い？」

「そう、僕はね彼を守って貰いたい訳じゃない。永遠の命を持つ彼にしてみれば君たちと過ごす時間は刹那かもしれない。彼も辛い想いをするだろう。でも、きっと彼は後で振り返って君たちと出会えた事を後悔することは無いと思う。だから、ほんの僅かの間でもいい。一緒に生きて欲しいんだ」

「一緒に、生きる……」

リヒトは頷く。

どくん、と心臓が鳴った。

手が、微かに震える。

怖いのではない。

不安なのでもない。

ただ、熱い感情が目からこぼれ落ちそうだった。

「……俺、出来るでしょうか」

「何も君が全て背負うことはない」

「でも、間違ったら……僕らまで、間違ってしまったら、ヴェイはもう立ち直れなくなる」

「君は優しい子だね」

竜王は微笑んだ。

「間違ったらやり直せばいい。人間は僕らに比べれば随分短い時間しか生きられないけれど、だからこそ出来ることがある」
頭を撫でられた。

竜王の優しい手だ。

「大丈夫、君がそう自覚をしている限り間違えることはない。困ったら僕を頼ればいい。道を間違えそうなら誰かに尋ねればいい。君は一人ではないのだから」

涙が、零れた。

ようやく、自分が何を恐れていたのか理解した。

ヴェイを傷つけたくなかったんじゃない。

それも確かに真実だろう。だが、それだけじゃない。失ってしまったのが怖かったのだ。彼が自分にとって特別な存在になってしまったのが怖かった。特別になってそして失ってしまったえば自分はもう立ち上がることも出来なくなってしまう。

だから彼に冷たい言葉を浴びせ、遠ざけようとした。

守りたいものがシーニス一人ならばなりふり構わず彼女だけを守り続けたい。でも二人になったら、もう自分の力だけで守れないと思ったのだ。

だけど、違う。

全てを背負うことはない。

一人でないのだから。

ようやく、肩の荷が降りた気がした。

剣を振るう時の高揚感。何も考えずにいる時が、おそらく自分が一番自由でいられる瞬間。そう、多分解放されたかったのだ。父親が死んで、守らなければいけないとがむしゃらに走ってきた。死ねば解放されるだろう。その思いから死と隣り合わせになるあの瞬間に興奮したのだ。

大切な物。

だからこそ重荷。

一人で背負おうとして、自分が潰れそうになっていることにも気が付かなかった。

でも今ようやく気が付く。

誰かが支えていたことを。

手を差し伸べてくれていることに。

「俺、あの人と一緒に生きてみたいです」
支えになるのとは違う。

絶望の淵から救うのとも違う。

ユーリでは支えると言うよりも負担にしかならない。大泣きして、喚いて、どうしようもならないことで彼に八つ当たりして、困らせるだけだと思う。それでも、一緒に居たいと思った。

一緒に生きて、一緒に感じて、些細な事で喜んだり、ケンカをしたり、そんな当たり前のような生活をしたと思った。

彼と、シーニスとこの村で。

「ありがとう。君たちになら安心して彼を任せられる。……それより」

不意に竜王が顔つきを陰しくする。

「一つだけ注意して欲しいことがあるんだ」

「注意？」

うん、と彼は頷く。

その瞳は鋭く、まるで戦場に居るかのような奇妙な感覚に襲われる。かれはちらりとシーニスを見やった。

彼女が完全に料理に集中している事を確認してなお用心するようにユーリの耳元に口を近づけた。

囁かれた言葉を聞いてユーリは表情を硬くした。

「本当、ですか？」

口から出た言葉が妙に緊張していた。

代わらず柔らかい口調でリヒトが言う。

「残念だけどね。……注意して。本当に危険な時はこれを吹いて僕を呼ぶんだ」

リヒトは小さな角笛をユーリの手にねじ込むようにして渡す。

「……これは」

「僕の小さい頃の角で作ったものだよ。これを鳴らせば例え西方大陸にいても聞こえる。全速力で駆けつけるからそれまで……」

はっとしてリヒトが口を閉ざす。

料理を終えたシーニスが料理をこちらに運ぼうとしていた。

「随分真剣に話しているのね。何の話？」

「な、何でもないよ。それより、手伝うことある？ 竜王に薪割り

させておいて僕だけ何もしないわけにいかないから」

リヒトがけらけらと笑う。

先刻までの真剣な表情はそこになかった。

「そんなこと、僕は気にしないのになぁ」

「俺が気にするんですっ！」

シーニスが声を立てて楽しそうに笑った。

「じゃあ、お皿、並べてくれる？」

八話 変化

竜王と魔王が村を去ってから五日ほど過ぎた。

村は「竜族が尋ねてきた」事に混乱をしている様子だった。ある者はヴェイの紋章師としての実力が高いことに喜び、ある者は竜たちが攻めてくるのではと不安を抱いている様子もあった。

だが、それもすぐに収まっていくのだろう。

ヴェイが刻んだ紋章のおかげで魔物が寄りつくのが格段減ったし、今は水害を減らす為の紋章を刻んでいるのだ。その威力が発揮される頃になればヴェイに感謝することこそあれ、悪し様に言う者は少なくなるだろう。

今はそうやって成り行きを見守るしかなかった。

「輪廻の輪から外れることか」

長老は灰の中に小石を投げ込みながら呟いた。

向かい合うように座り、長老が投げ込んだ石を見守る。ガラス玉のような小さな石は、灰に残る熱でじりじりと熱を帯びていき橙色へ色を変えていく。それが不意に弾けて飛ぶと長老は灰の上に紋様を描くように棒で何かを描いた。

「あるいは冥府の王ならば可能かも知れぬ」

長老は灰の上をじっと眺める。

灰読みというオミオスに伝わる古い卜占だ。ユーリには何をしているのか良く分からないが、長老の灰読みはこの村で一番良くあたる。

「冥府の王は生と死を司る神。慈悲をお与えになったのならロウの王はもはや人とは呼べぬ存在になっておるじゃろう」

人ではない。

そう聞いてユーリはぎゅっと手を握りしめる。

「輪から外れた人間を元に戻すことは可能なんでしょうか」
老人は首を横に振る。

「わからぬが、冥府の王が外したということならば、戻すことも可能じゃろう。だが、分からぬ。紋師たちは望んでも得られず、なぜ王にのみそれをお許しになったのか」

ぱちん、と再び小石が弾ける。

「違いがあるとすれば王は責務を果たすために望み、紋師達は自らの欲望の為にそうしたこと。……さて、となれば何故南の王にはそれを許さなかったのか」

「南の王？」

「ユーリが生まれるよりもずっと前の話じゃ。此度ほど大規模な戦では無かったが、南の国でよく似たことが起きた。魔を統べる王と精霊族の王が助力され治まりはしたが、望んでも冥府の王が力を貸すことは無かった。ロウの王と南の王、いかな違いがあるというのかのう」

「……」

ユーリには分からない。

気持ちの上で些細な違いがあったのかも知れない。その南の王も自分の責務を果たすために望んだとしても、心から望んだのか、あるいは周囲の期待を裏切らないためにそうしたのかも分からない。逆にヴェイの方にそう言う想いがあったかもしれないし、違いなんて全く無いのかも知れない。

南の王が現実に永遠の命を手にしたとして後で何を望むか分からないが、ヴェイは今永遠の命を望んでいない。

それだけは分かる。

ユーリは自分の手のひらを見た。

自分はどうかだろうか。

姉を守るために力が必要で誰かがそれを与えてくれるとしたら迷わず受け取る。

けれど、自分が永遠に生きるとしたら、老いもしないとしたら、きっと老いるシーニスを見て彼女の死が怖くなる。彼女も共に生きられたとしても、いずれ彼女は周りがどんどん死んでいくのを悲

しんで人と関わらないようになるのだろう。悲しむ彼女の姿を多分自分は見えていられない。

(……そうか)

何となく分かった気がした。

(ヴェイは最初から永遠なんて望んでいなかったんだ)

多分それが一番大きな違いではないだろうか。

だとしたら理不尽だ。

とても残酷な事だ。

「……わしも永久を望んだことはあった」

「長老？」

「この年になってようやくそれが何を意味するか理解したがの。わたしには紋師達のような才覚はなく、禁忌に手を出すこともかなわなんだ。だが、それすらも罪と言うのであれば、あのお人はわしらの罪まで背負ってくれているのかも知れぬ……さて、ユーリ」

「はい」

ユーリは背筋を正す。

棒で灰を突きながら長老は酷く難しい顔をする。

「南東から招かれざる客が来るようだ。まだ道は定まってはおらぬが……良くない兆しが見える。重々気を付けるようにの」

「……ありがとうございます」

ユーリは深々と頭を下げる。

良くない兆し。南東からの招かれざる客。

それが具体的に何かは分からないが気を付けるに越したことはない。い。

もう一度深く礼をしてユーリは部屋を出た。

「ユーリ」

長老の家から出るとすぐに声をかけられた。

ラルドとジェルダ。

ラルドはいつもと変わらず穏和な表情をしていたが、ジェルドは少し厳しい顔つきをしていた。

おそらくユーリが出てくるのを待っていたのだろう。長老の家を尋ねるのは事前にジェルドに話してあった。彼らも卜占の結果が気になっているのだろう。

「どうだった？」

ラルドに尋ねられ、ユーリは首を振る。

「良くない兆しがあるらしい。南東から招かれざる客があると」

「そうか……ならやっぱりネビスを連れて行かない方がいいのかな」
「ネビス？」

ユーリは顔を上げる。

困ったようにラルドが笑う。

「自警団の巡回に参加したいって言い出したんだ」

「え……」

「おおかた魔物が出なくなって安全だとか思っているんだろうよ」

呆れたようにジェルドが息を吐く。

ネビスは魔物を怖がってなかなか討伐隊に参加したいと言わなかった。村の中の巡回や連絡役も重要な役所だからと、自警団が外に出払っている間、村の中を守る仕事をしていた。元々武器を持って戦えない若者はそうして村の中を守るのが役割だ。ネビスは訓練では射士の才能があった。そのため一度だけ後方支援にかり出された事があったが、魔物の声に怯えて役に立たなかった。それ以来一度も討伐隊に参加していない。

その臆病なネビスが何を思って参加しようと思ったのか分からないが、ジェルドの言うようにヴェイの紋章術のおかげで魔物が出なくなっただろうと思う。

「あいつ分かってるのか？」

「うーん、話はしたんだけどね」

「あのふとちよ栄養が頭に回ってないんじゃないかねえのか？」

けたけたと笑い出したジェルドをラルドが睨んで脇腹にひじ鉄を

食らわせる。

「うぐっ」

「まあ、僕と一緒に後ろから弓での援護が中心になるだろうから、心配は無いだろうけど……」

「一度出ればまた嫌になって村に籠もるようになるよ」

ぶっきらぼうに言うのと、ラルドは肩を竦める。

「その位で済めば良いけどね」

村の周囲には確かに魔物は寄りつかなくなっている。皆無ではないものの、狩る魔物の量は格段に減っていた。だが、魔物が穏やかな分盗賊が増えるため、これから自警団の主な仕事はならず者達を撃退することになる。

人間が相手なだけに加減が難しくなる。ラグネの法律では相手がならず者であった場合、戦闘で殺してしまったとしても罪に問われることは少ない。だが、だからといって端から殺していく訳にもいかないし、なるべく生け捕りにして引き取ってもらうのが普通だ。場合によっては賞金も出てくるのだから、難しくても生け捕りにした方がいだろう。

だが問題はその難しさではない。

万一、ネビスの放った矢が人間を殺してしまったら、あるいは人に当ててしまった感触だけで彼は酷く怯えるだろう。悪人とはいえ相手は同じ人間。割り切るのも難しい。

ユーリも過去に何度かそう言った盗賊と斬り合った事がある。幸い、相手を殺してしまうことは無かったが、魔物とは違う独特の感触は怖かった。今もその感覚はまだ残っている。相手が戦えない者だったらあの一撃だけで殺せただろうと思うだけに人と戦うのは怖かった。

「怯えて出てこなくなるならいいよ。でも、力の恐ろしさを自覚しないで昂揚してしまったらそれの方が怖いよね」

「だから、そんな仮定の話は止めろって言ってんだよ。そもそもそんなことになったら俺目が覚めるまであいつボコボコにするからよ」

「……逆に目覚めないんじゃないか？」

ユーリが言うと彼はからからと笑う。

「だから仮定の話だ。それより、今日これから差し入れ持ってお前ん家に夕食ねだりに行く」

「相変わらずいきなりだな」

彼がいきなりなのはいつもの事なので、今更咎める気にもなれない。

駄目だといっても普通に自分の家のように夕食を食べているだろう。

「ラルドは？」

ちらりと視線を向けると彼は困ったようにする。

ヴェイが来る前はそれでも時々ジェルドと一緒に来ることもあったが、まだ村長から禁止されているのだろう。悪いことを聞いてしまったと思う。

「僕は……」

「お前たまには叔父貴に逆らってもいいんじゃないのか？」

ジェルドは従弟の肩を叩く。

真面目な性格のラルドは滅多な事で父親に逆らわない。

そのラルドが珍しく少し考えるようにして言った。

「……そうだね、たまには良いかも知れないよね。ユーリ、僕もお邪魔しても構わないかな？」

「ああ、もちろんだ」

「ジェルドが言うなよ」

言ってユーリはジェルドを睨み付けたが、彼の屈託のない笑みを見てすぐに笑顔に変わる。

同時にラルドも吹き出した。

「ユーリ、それじゃあ怒っているクチに入らないよ」

「だって、こんな間抜け面見ていたら怒る気も失せるだろっ」

「おいおい間抜けとは言ってくれる、なっ！！」

ジェルドの腕がユーリの首に絡みつく。

腕で首を絞められて息が苦しいが、笑いが止まらない。

笑いながらジェルドの腕を叩く。

こんなに笑ったのは随分と久しぶりな気がする位に笑った。

悪いことなんてこれで忘れてしまえばいいのに。

九話 兆候

心強い、とジェルドが漏らした気持ちも分からなく無い。

夕食が終わり、軽く雑談をしている時だった。

普段の会話をするのとあまり変わらない口調でヴェイは自警団が出払う間は村の中を守ると言った。

彼にそこまでやってもらって良いのだろうかという気持ちの方が強かったが、彼は静かな口調で言った。

「その程度の事は当然だ」

同じ街に住んでいるのだから。

そう言う言葉にユーリは少し息を吐いた。

彼が来るまでユーリは村に近づく魔物達を一匹でも討ち漏らしてはいけないという気持ちで一杯だった。自警団員はともかく、村には戦えない女子供や年寄りが多い。ユーリが一撃で仕留められるほどの弱い魔物でも、彼らには脅威だ。分かっているからこそ、一匹も漏らしてはいけないと言う気持ちが強かったのだ。

しかし、ヴェイが村に残っているのなら、楽な気持ちになれる。

無論、手を抜くつもりなど無い。今までと変わらずに戦うつもりだったが、一枚壁があるのと無いのでは格段に違う。

自分一人で守る必要なんかないんだという気持ちは安堵にも脱力にも似た奇妙な感覚だった。それが「悪くない」と思えるのだから、自分は今まで酷く緊張をしていたのだと実感をした。

「俺としてはなあ、御仁に美味しいところかさられるのは癪なんだよなあ」

シーニスの淹れたお茶を飲みながらジェルドが顔を顰める。横でラルドがくすくすと笑った。

「よく言うよ、いつもユーリにはっかり戦わせて、自分はサボる事ばかり考えているくせに」

「馬鹿、そりゃお前、ユーリに花を持たせているに決まっているだ

ろ」

「……どーだか」

ユーリが呆れた声を出すと、シーニスはくすくすと笑った。

「でも、みんなが頑張ってくれているから私たちが村の中で安心して暮らせているのは確かよ。本当に、ありがとうございます」

「あ、いやその……」

改まって礼を言われ、ラルドの言い分に心当たりのあったジェルドはさすがに後ろめたかったのか困ったようにあさっての方を向く。たじたじと言った風だ。

齒に衣着せぬ物言いをするジェルドだったが、シーニスには少し弱いようだ。

すかさずラルドが言う。

「シーニスに感謝されたんじゃ、ジェルドも頑張らない訳にはいかないよね」

「う、うるせえよ」

「それはともかくとして、戦いがおざなりになってもいけないからヴェイさんが守ることは他の自警団員には言わない方が良いかも知れない」

ユーリは頷く。

確かにそうだ。

紋章師が村を守っているからと戦いに手を抜く者も増えるかも知れない。いくらヴェイでも村のあちこちから襲われれば守りきることも出来ないだろう。それに万一彼が村を離れることになったら、守られることに慣れた村ではすぐに破綻してしまう。少なくとも常時戦える人間が必要なのだ。そう考えれば言わない方が適策だとユーリも思う。

同意するようにヴェイも頷いた。

「だからこの場で言わせてもらった」

「つーと、俺らは御仁に手を抜かないと信頼されているわけだ。あーあ、ますますさばれなくなったなあ」

面倒だとしても言いたげな態度だったが、声音はどこか楽しげだ。信頼されているのが嬉しいのだろう。

少なくともユーリは嬉しかった。

ジェルドやラルドから信頼されるのとも、シーニスから信頼されるのとも違う。こちらが一方的に頼っているだけなのかも知れないけれど、この人に信頼されるのが嬉しかった。

それは強い紋章師に認められたから嬉しいというのではなく、ヴェイだから嬉しいのだろう。

不意に、何か気配を感じてユーリは外の方を見る。

「どうしたの？」

「誰か来るようだ」

シーニスの問いに答えたのはヴェイだった。

ジェルドもラルドも外の気配に気づいたように腰を浮かせた。

穏やかではない雰囲気が漂っている。外の気配はどこか殺気立っているように思えた。ユーリは警戒するように自分の剣の側に立った。

ややあって、家の外に足音が響き始める。

どンドン、と戸を叩く者があった。

「シーニスさん、こちらにラルドさん、いますよね！」

ネビスの声だった。

「ネビスくん？ どうしたの？」

シーニスは慌てたように扉を開く。

反射的にユーリは剣を取った。

あの臆病なネビスが夜遅くにこの家を探ねるとなれば尋常ではない用があるのだ。そもそも、ユーリにでさえ怯えているのだ。ラルドがいるとは言え、この家にはヴェイの存在もある。よほどの事が無い限り怯えて近づかないだろう。まして、こんな時間にならなおのことだ。

それはユーリの勝手な思い込みかもしれないと思ってみただ、彼の表情を見るとすぐに確信に変わる。

飛び込んできたネビスは蒼白だった。

走ってきたのだろう。呼吸こそ荒かったが、普段のように真っ赤な顔をしていない。今にも倒れそうな程青い顔をしている。

「何かあったのか？」

低い声でジェルドが尋ねる。

普段は何だかんだ言ってネビスをからかうジェルドだったが、さすがに只ならぬ様子にからかう気も起きなかったのだろう。

壁に立てかけていた剣を取って腰に付けながら問う。

「も、森に明かりがあつて……不審に思ったゲール達が見に行ったんだけど、傷だらけで戻ってきて……それで」

ラルドが視線を鋭くさせる。

「彼らは？」

「無事です。傷は酷いけど、命に別状はないです。男達に襲われたと言っていました」

それを聞いて少しほっとする。

一瞬盗賊だろうかとも思ったが、だとしたら目撃されて殺さずに戻す理由が分からない。作戦を練っている途中で姿を見られたなら殺すか人質に遣うために捕らえておくというのが普通だろう。彼らが上手く逃げて来たのだとしても、それならばネビスがここに来る前に既に村が襲われ始めていてもおかしくないのだ。

同じようにジェルドもラルドも妙な違和感を覚えているようだった。

ユーリは昼間の長老の言葉を思い出した。

南東からの良くない客人。

彼らを襲った男達があるいはその客人ではないだろうか。だとしたら相手は少々厄介なのかも知れない。あの長老に‘良くない兆し’と言わせたほどのものだ。それに、ゲール達はユーリほどでは無いにしてもそれなりに腕に覚えがある。相手が襲ってくるとは思わずに油断していたのかも知れないが、夜遅く、森で何かしている相手に油断しないわけがない。

あまり軽く見ない方が良さだろう。

少し考えて、ジェルドが問う。

「その連中はどうしてる？」

「今、見張っています。合図が無いって事は動きが無いってことなんです」

「ユーリ、ジェルド、僕たちも行こう。動かないにしても早めに対処した方がいい」

彼の言葉にユーリは頷く。

少なくとも相手が何者か確かめる必要はあるだろう。場合によっては斬り合いに発展するかも知れない。

ジェルドも同感だと漏らした。

「シーニス、悪いが弟借りるぞ」

「……はい。気を付けて」

シーニスは不安そうな表情を見せたが、気丈に頷いて見せた。

これがユーリの仕事であることを彼女もちゃんと理解しているのだ。

ラルドはネビスの方を見る。

「ネビス、万一のこともある。村の中を警戒して回って、外れに住んでいる人たちには広場に集まるように伝えて」

「え、俺が？」

戸惑う彼にジェルドが活を入れる。

「一線に出て戦いたいって言い出した奴が泣き言いうんじゃねえ。

……御仁、悪いが女連中のことを頼む」

「心得た」

頷いたのを確認して、ジェルドは外に飛び出す。

ユーリもまたそれに従い、ラルドは少しネビスに声をかけてからその後続いた。

十話 刺客

見張り台に近づくと、明らかに様子がおかしいことが分かった。普段は焚かれているはずの火が消え、当たりに血のような匂いが充満している。

ユーリは無言で剣を抜いた。

それに倣うようにジェルドも剣を引き抜いた。ラルドは弓をつがえ探るように当たりを睥睨した。

「上だ!」

ジェルドが叫ぶと同時にラルドは見張り台の方に向かって牽制の矢を放つ。

ひゅん、と鋭く風を切った矢はかつん、と木製の台の下側に当たる。

人が動いたのを感じた。怯んだ気配すらない。

「誰だ!」

ジェルドが叫ぶが、返事は帰ってこない。

代わりにその人影はラルドの放った矢を引き抜き投擲をするように投げ返した。

「!」

反射的にユーリはラルドの前を斬る。

ぱき、と鋭い音と共に矢が真っ二つに割れて地面に落ちた。

矢は本来弓の力を利用して射るために作られている。素手で投げたとしてもこんな二も鋭く風を切る物ではない。増して相手からは殆ど殺気を感じない。

意味を悟って彼は蒼白になる。

相手は、恐らくそう言った訓練を受けている人間。

恐怖も殺意も切り取られた人間なのだ。

「うぐっ!」

「ジェル……わっ!」

真横でジェルドのうめき声を聞いてユーリがそちらに気をとられた瞬間だった。見張り台の上から人影が落ちる。それは躊躇うこともなく真っ直ぐユーリ達の元へ突進してきていた。

繰り出された剣を受け止めてユーリは奥歯をかみしめた。

強い。

剣を交えただけで分かる。その力の強さも、技術的な面も今まで戦ってきた誰よりもずっと強い。或いはそれはユーリの剣技さえ凌駕する。

「くそつたれ！」

ユーリは男の腹部めがけて蹴りを入れた。

その一撃をまるで予測していたかのようにだった。男はやや腰を引き自分から吹き飛ぶことで大きな負傷を免れたのだ。

ユーリは剣を構え、低く言った。

「ラルド、ジェルドの援護を」

「……分かった」

相手は恐らく二人だけだ。他に気配は感じない。だとしたら、ラルドはジェルドの援護をするべきだと考えたのだ。彼の力を侮る訳ではない。ただ自分は一人でもやれるのだと認識する。それは直感だった。

剣を地面と水平になるように目の前で構える。徐々に感覚が研ぎ澄まされていくのを感じた。いつだったか魔王が触れた手の甲が僅かに青白い光を帯びて見せた。

「！」

男は警戒したように一、二歩退いた。

じりじりとした緊張感が二人の間を流れた。

すぐ間近でジェルド達もまた剣を交えているというのに、それすらも気にならないほどにユーリはその戦いに集中をしていた。

魔物と退治していた時のような奇妙な高揚感は無く、逆に酷く冷静だった。

今なら、躊躇いもなく人を殺せるのではないか。

否、相手が人間のように見えないからそう感じるだけなのか。
分らない。

ただユーリは冷静に相手の出方を窺った。まるで何時間にもらみ合っているかのようなだった。先にしびれを切らしたのは男の方だった。

たん、と地面を蹴ったかと思うと常人では考えられないほど跳躍をしてユーリに襲いかかってくる。

リズムを刻むようにユーリは後ろへと飛ぶ。

がつん、と今まで彼がいた位置を男の剣が切り裂いた。瞬間、男は素早い動作でユーリの懐に潜り込んだ。

斬られると思ったのが先か、身体が動くのが先か。

ユーリの剣が男の腕を薙いだ。

「！」

剣を握ったままの状態の片腕が宙を舞った。

初めて驚いた表情を作った男をユーリはそのまま蹴り倒すように地面へと押し倒した。

頭部と肩を抑えて、男に向けて剣を突きつける。

殺すつもりはない。

聞きたいことがあった。

「大人しくしろ、殺しはしない」

ユーリは肩を掴んで仰向けにさせる。

瞬間男の目が見開かれた。

「？」

開かれた目の奥に何か奇妙な模様が浮かんでいるのが見える。紋章術の紋様のようにも見えたが、それは見たこともない形をしている。

ごぼ、と男が口から何かを吹き出した。

一瞬血を吐いたのかと思った。

だが、それは違った。

「……砂？」

何故突然砂を吐き出したのだろうか。

それが何かを確かめようと男に目を向けて再び驚いた。

男は既に息絶えていた。

見開かれた目は虚空を仰ぎ、砂を吐き出した口からは呼吸音が無かった。

人を殺したという感覚はなかった。

腕は確かに斬り飛ばしたが、だからといって男がすぐに息絶えるようには思えなかった。止血をして感染症にだけ注意すれば命に別状も無いはずだった。

なのに、何故。

「…………ユーリ」

ジェルドとラルドが近づいてくる。

その目はやはり驚いたように見開かれている。だが、それは人を殺したユーリを責めるような色を含んではいなかった。

「それ、お前がやったのか？」

「自覚はない」

「俺たちの方もそうだ」

言ってジェルドは倒れている男を示した。

仰向けに野転がった男の肩には矢が突きたたっているが、それは致命傷には成り得ない位置だ。

ぞくり、と背筋が寒くなる。

「……砂のようなものを吐き出して息絶えたんだ」

ラルドが言う。

ユーリは頷いた。

「こっちもそうだった。あと、変な紋章のようなものを見た」

「紋章？　ジェルド、見た？」

「いや、俺は気付かなかったが」

では見たのはユーリだけなのだ。

あの妙な形の紋章。

ヴェイに聞けば分かるだろうか。

その後ユーリ達が見張り台の中を訪れると、見張りに立っていた三人は既に息絶えていた。

首を掻ききられて即死だった。

十一話 魂を巡る紋章

ユーリが描いて見せた紋章を見て、ヴェイは顔を顰めた。それは明らかに良くないものを見た時の表情だ。

「分かるか、御仁」

ジェルドが椅子に腰を掛けながら真剣な表情で問う。

見張り台の三人の自警団員が惨殺され、駆けつけたユーリ達が怪しい動きをしていた二人を取り押さえた翌日の事だった。ラルドは状況確認のために見張り台の方へと向かい、ジェルドはヴェイに話を聞くために姉弟の家を訪れていた。

ユーリは昨晚見た男の瞳に映し出された紋章のことを話し、それを紙に描いて見せた。銀髪の男は暫くその紙を眺めていたがやがて困ったようにその紙を丸め、ふ、つと息を掛けた。とたん紙は燃え上がりやがて灰になって消えた。

「この紋章を他に誰かにみせたのか」

抑揚のない声でヴェイが問う。

彼は首を振った。

「いや……見せていないけど、それが何かあるのか？」

「誰にも見せるな。誰にも言うな。二度と描くな」

「何だ随分と高圧的な態度じゃねえか」

呆れたようにジェルドが言う。

確かに彼の言葉はまるで命令するかのような口調だったが、だからといって理不尽な事を命令しているようではないように思えた。むしろ何か危険なことに対する忠告。ユーリにはそんな風に感じられた。

ヴェイは少し息を吐き首を振る。

「すまない。何と言えいいのか分からない」

「そもそもあの紋章は何なんだ？ 何か見られたらマズイものなのかよ？」

「描くのは危険だ。ユーリは紋章師ではないし、媒体が紙であったために何事も起こらなかった」

「あ？　つまりそりゃ、アンタが紙以外に描いたらどうにかなっていったってことか？」

ヴェイは頷く。

「才能のある者が描けば意味が増す。……紋章師は消して輪を描く事はない」

「輪？　でもほこらに刻まれている紋章は輪を使っていた気がするけど」

村を魔物の脅威から護るために作られたほこらには確かに円形の紋章が幾重にも重なり合って描かれていた気がする。輪を描かないと言うならば、あれは何であると言うのだろうか。

「陣としての円を描くことはある。だが、輪を描くことはない」

ふうん、とジェルドが腕組みをする。

「そう言う話をするって事はさっきユーリが描いたのは円じゃなくて輪だったってことだな？」

頷く。

肯定の意味だ。

分からないな、とジェルドが言う。

「俺たちには円も輪も区別が付かないが、何かまずいことがあるのか？」

「円は力を集める意味があり、輪は魂を意味する」

「魂？」

「先だっつての大戦の原因になったものだ」

唾が喉を伝って落ちた。

先だっつての大戦、それは紋章師達が永遠の命を手に入れるために本来は禁止されている分野に手を出し、それに終止符を打とうとした紋章師の王達との戦い。ヴェイを苦しめる原因となった戦いの事だ。

「じゃあ、あの紋章は……」

「いや、あれは使者に仮初めの魂を刻むための紋章。お前達の戦った者は人ではない気配をしていなかったか。おそらく何者かに使役されていたのだ」

言われてユーリは瞬く。

覚えがある。最初は感情を表に出さないように訓練されている人間のようにもみえた。だが、動きがまるで操られているようにも感じた。砂を吐き出したこと、あんな簡単に死んでしまった事、腕を跳ね飛ばしたにも関わらず流れた血の量が不自然に少なかった事。

だが、こちらの様子を窺ってみたり、腕を切り離された時に驚いた表情を見せた彼らはどこか人間のようにも見えた。だから自分の腕の下で砂を吐いて死んだ男を見て嫌な感覚に襲われたのだ。あの状態で相手が死ぬのは想定していなかったのだ。

「俺にはあいつらが異常だが人間に見えたな」

「仮初めでも魂は魂だ」

「つまりあいつらも普通に生きていた、ってことか？」

「魂があるという意味では。生命という意味では生きていない」

「わからんな。どう違う」

「器が持たない。いずれ壊れ別の器が必要になる。魂は再び刻み直されそのたびに劣化を始める。禁呪として強制的に輪廻を起こさせる方法はあるが、お前達の見たものはそれよりも危険なことだ。いずれ魂は行き場を失い二度と何にもなれなくなる」

「それは……」

「天の理に触れる」

「……」

正直言えばユーリには難しすぎて分からなかった。だが禁呪にされている方法よりも危険な術を使い彼らが動いていたのは納得できた。

死の危険に対して余り躊躇がなかったのもそのためなのだろう。増して使役されていたと言っていた。或いは消滅の危険がある程に、本人の意思とは関係なく何度も繰り返し紋章を使われていたの

かも知れない。

ユーリは妙に腹が立つのを感じた。
まるで物のようだ。

人の魂はそんなぞんざいに扱われていいものではないと思う。天に理があるとしたら、どうしてそれを罰しないのだろうか。

「狙いは私だ」

ヴェイが当然のように言う。

「私の血が不老長命の妙薬になると信じている者もいるだろう」

それは奇しくも竜王が自分に告げた言葉と同じだった。

ヴェイの血が不老不死の薬になると信じて襲ってくる輩もいるだろうと。だから気をつけた方が良い。彼はそう言ったのだ。実際にヴェイの血にそんな力はないのだと竜王は言った。例えば彼の血を引く子供が生まれたとしても、子供は先に老い死んでいく。同じ血を引いたとして、紋章師としての強い才能は受け継ぐかも知れないが、不老不死の性を受け継ぐわけではない。彼が不死であるのはあくまで冥王に力を預かったからなのだ。

だが、人間はそれを信じないだろう。

血に力があると信じて襲ってくる者も必ずある。だから気をつけろ、竜王はそうユーリに告げた。

「竜王と魔王がここを訪れたのが原因で魔力の変動を感じ取っている。恐らく誰かが様子を見に来ているのだろう。あるいは紋章師の噂を聞く度にしらみつぶしにしているのかも知れない」

「……そうか、御仁を挑発していたのか」

「挑発？」

ああ、とジェルドが頷く。

「おかしいと思ったんだ。見張り台の連中は即死だった。それなのにゲール達が生き残った理由。連中、御仁がこの村にいるなら出てこないわけがないと考えていたんだ」

「……………」

それはヴェイの性格を承知の上だったと言うことにはならないだ

ろうか。

嫌な感じがした。

人を使役して襲わせた連中が、もしかするとヴェイの仲間だったかもしれないと言うことになる。それはあまりにも辛いことだ。

「俺たちが出て行った事で、連中はここに御仁がいる可能性は低いと判断しただろうが……ふん、あんまりいい兆候とは言えないな」挑発して出てこなかったからといって諦めるようには思えない。可能性は低いと判断しても、再び来る可能性だって十分考えられる。

既に三人、襲ってきた二人を犠牲者と考えながらも既に五人が犠牲に鳴っていることになる。これ以上、何かの犠牲が出る前に何か考えなければならぬ。

ユーリはポケットに手を入れる。

指先に当たるのは竜王から受け取った角笛。

吹けば彼はどこからでもやってくると言った。

使うべきだろうか。竜王に尋ねれば何かいい案を思いついてくれるかも知れないし、ヴェイだけを安全な場所に逃がしてくれるかも知れない。

考えてユーリは目を瞑った。

いや、彼が不老であるなら、この地上のどこに安全な場所があるというだろうか。彼の血が薬になると思わずとも、一所に留まれば年をとらない彼を奇妙なもののように思っただけで狩ろうとする連中だっただけで出でくるだろう。

彼には戦う力がある。

だが、だからといって人を傷つけることが平気というわけではないはずだ。

ここではないどこかへ逃げたとしても、いずれ何かが起こる。生きる年月が長い分、彼に降りかかる厄災は多いだろう。それを少しでも軽くしたいと、ユーリは彼と一緒にいることを選んだのだ。今、どうすることが最善だろうか。

(……本当に、どうすればいい?)
多分全部において良いという事なんてあり得ない。
でも、考えなければいけない。
何が一番良いのかを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4782d/>

終焉の翼

2010年10月13日15時22分発行